

『生ける死者からの最後の手紙』

エルサ・バーカー著

【作品情報】

原題: Last Letters from the Living Dead
Man (1919)

著者: Elsa Barker

【著作権について】

本作品の原文は、著作権保護期間が満了している
(パブリックドメイン)と判断される資料に基づいて
います。

【翻訳について】

本日本語訳は、公開者本人による独自翻訳です。
既存の翻訳や他者の著作物は一切使用していま
せん。

【注意事項】

万が一、著作権等に問題がある場合は、速やか
に対応(修正・削除)いたしますのでご連絡くだ
さい。

【翻訳者】

SEIJI

【免責事項】

本翻訳は個人による学術・研究・情報提供を目的としたものです。内容の正確性・完全性について保証するものではありません。

本翻訳の著作権は翻訳者に帰属します。無断転載はご遠慮ください。

2026/6/23

序文

この本は、「Living Dead Man(生ける死者)」シリーズの第三作であり、最後の作品です。1917 年 2 月から 1918 年 2 月にかけて書かれました。

その後、私は自動書記を行う能力——あるいは、おそらくそう言うべきなのでしょう、「そうしたいという気持ち」——を失いました。

この第三の原稿は、前の二作よりも短かったため、私はこれを、おそらく永遠に完成しない断片作品なのだろうと思っていました。

そして、出版社から「断片作品として出版してはどうか」と勧められるまで、私は初めて全体を通して読み返さなかったのです。そしてその時になって初めて、これは実際には完成した作品であり、有機的にまとまった一つの全体なのだと気づきました。

「おそらく——」

私は、自分でも驚きながら、まだ半ば信じられない
気持ちのまま、自分にこう言いました。
「私たちの結末を形作る神のような存在があるのだ
ろう。」

というのも、この本が書かれた当時に出版されてい
たなら、時期尚早に見えたことでしょう。ですが今と
なっては、その大部分は、まるで昨日の新聞の社
説のように時宜を得たものとなっているからです。

このシリーズの前の本、『Letters From a
Living Dead Man(生ける死者からの手紙)』
(1914 年)および『War Letters From the
Living Dead Man(生ける死者からの戦争の手
紙)』(1915 年)を読んでいない方々のために、そ
れらの本の序文から引用しておきます。

第一巻の序文で、私は次のように書きました。

「昨年のある夜、パリで、私は強い衝動に駆られて

鉛筆を取り、何かを書かなければならないと感じました。しかし、何について書くのかはまったく分かりませんでした。

その衝動に従うと、私の手はまるで外側から掴まれたかのようになり、非常に不思議な、個人的内容を持つメッセージが現れ、その最後には『X』という署名がありました。

「そのメッセージの意味は明白でしたが、その署名だけが私を困惑させました。

「翌日、私はこの文章をある友人に見せ、『X』が誰なのか見当がつくかと尋ねました。

「すると彼女はこう答えました。

『まあ、あなた知らなかったの？ 私たちはいつも Mr. -- のことをそう呼んでいるのよ。』

私は知りませんでした。

さて、その Mr. -- は、パリから六千マイルも離れた場所におり、私たちが思うには、まだ生者の世界にいるはずでした。

ところが一、二日後、アメリカから手紙が届き、その Mr. -- が、アメリカ西部で亡くなったと書かれていたのです。それは、私がパリで『X』という署名のある自動書記のメッセージを受け取る数日前のことでした。

私の知る限りでは、彼の死をヨーロッパで最初に知らされた人物は私でした。

そこで私はすぐ友人のもとを訪れ、『X』がこの世を去ったことを伝えました。

彼女は少しも驚いた様子を見せず、私が『X』の手紙を見せた数日前から、すでにそう確信していたのだと言いました。ただ、その時には口にしなかっただけだということです。

当然ながら、私はこの異常な出来事に強い衝撃を受けました。

しかし、二つの世界の間での交信という主題そのものについては、私は異常なほど無関心でした。

スピリチュアリズムは昔から私の心をまったく動かさず、その分野の一般的な標準的著作すら読んだことがなかったのです。

その後の数週間で、『X』という署名のある手紙がいくつか自動書記によって書かれました。

しかし私は熱中するどころか、この書き方に対して

強い嫌悪感を抱くようになりました。

それでも続ける気になったのは、もし本当に『X』が世界と交信したいと望んでいるのなら、それを助けられる自分は非常に恵まれているのだ、と友人に説得されたからでした。

やがて私は、自動書記に対する強い偏見を克服するにつれて、『X』が語る死後の世界について、次第に興味を抱くようになりました。

最初に、これらの手紙を私の序文付きで出版してはどうかという提案があった時、私はあまり乗り気ではありませんでした。

私は、多少なりとも知られている数冊の本を書いた著者でしたから、自分の文学的評価の安定について、ささやかな虚栄心を持っていたのです。

私は、変人とか、『奇人』として知られたくありませんでした。

しかし私は、これらの手紙が私の目の前で自動書記によって書かれたものである、と述べる序文を書くことには同意しました。

それは真実ではありましたが、完全な真実ではありませんでした。

それで友人は満足しましたが、時が経つにつれ、私は満足できなくなりました。

どこか誠実さに欠けるように思えたのです。

私はこの問題を自分自身の中で徹底的に考え抜きました。

最終的な決断が下されるまでには、その手紙の三分の二ほどがすでに書かれていました。

そして私は、もしこれらの手紙を出版するのであれば、それは率直な序文付きで出版しよう、と決めたのです。

つまり、それらを私がどのような状況で受け取ったのか、その正確な事情を明かした序文です。

ロンドンとニューヨークで同時出版された『Letters From a Living Dead Man』が呼び起こした反響は、私を驚かせました。翻訳権を求める依頼が次々と届き、私は世界各地から来る手紙に圧倒されました。

できる限り返事を書きましたが、すべてに答えることは到底不可能でした。

ここで再び、第二巻『War Letters From the

Living Dead Man』(1915 年)の序文から、簡単に引用しておきます。

『X』の第一巻では、私はその筆者が誰であることを明かしませんでした。

家族の同意なしにそれを公表する自由はないと感じていたからです。

しかし 1914 年の夏、私がまだヨーロッパに住んでいた頃、『New York Sunday World』紙にブルース・ハッチ氏との長いインタビューが掲載されました。

その中で彼は、この『手紙』が、カリフォルニア州ロサンゼルス故デイヴィッド・P・ハッチ判事——彼の父親——からの本物の通信であるという確信を述べていました。

1918 年に『手紙』が完成した後、およそ二年間のあいだ、私は『X』の存在を感じたのは二、三回だけでした。

その時彼は、私の個人的問題について短い助言を書いただけでした。

1915 年 2 月 4 日、ニューヨークで、私はある日突然、『X』が部屋の中にいて、何かを書きたがっていることに気づきました。

しかし以前と同じように、一、二回の例外を除けば、彼が何を書こうとしているのか、私はまったく見当もつきませんでした。

彼は次のように書きました。

『私が戻って来て、この戦争の物語を、向こう側から見たままに語る時、あなたは各国のすべての官

序よりも多くを知ることになるだろう。』

その後、私は自動書記の過程について説明を続け、さらにこう付け加えました。

私ほど、自分の神秘体験に対して冷徹に批判的な者はいないでしょう。

もし私が経験したオカルト的体験の、ほんのわずかな断片でも経験した人がいたとしても、その人以上に冷静で批判的な態度を私は取っています。

私は、これらの手紙が、その表向きに主張している通りのものであるという考えに反対する、あらゆる論理的議論を喜んで受け入れます。

しかし、それらの議論を、私が持っている『本物であるという証拠』と比較した時、肯定する側の重み

が否定を上回るのです。

そのため、私はそれらを受け入れています。

この証拠はあまりにも複雑であり、その多くはあまりにも個人的なものであるため、ここでその輪郭を示すことすらできません。

第二巻は、戦争を「隠された側面」から扱い、連合国の勝利を予言した内容でしたが、第一巻以上の関心を引き起こしました。

手紙の洪水はその後も続きました。

1916 年、ジョイス・キルマーの親切な強い勧めによって、私は別の種類の小さな自動書記作品集『Songs of a Vagrom Angel』を出版しました。

その“天使”とは、「Living Dead Man」シリーズ

の中で『X』によって描写された、美しい存在のことです。

『Songs』は批評家たちから非常に好意的に迎えられました。

その本全体は、三篇の詩を除き、二十二時間のうちに「書き取られた」ものでした。

1916 年の夏、私はカリフォルニアへ行きました。そして、1917 年 2 月、その地でこの第三の本の執筆が始まったのです。

しかし私は、自分の文学的人生が自動書記作品によって押し流されていくことに、次第に落ち着かなくなっていました。

そして、山のように積み重なる手紙のやり取りによって、本来の創作活動に割ける時間がますます少

なくなっていたのです。

ついに 1918 年 2 月、その「内面的葛藤」は、自動書記の完全な停止という形で頂点に達しました。

私の中の芸術家としての部分は、すっかり疲れ果て、苛立っていました。

読者がこの比喩の誇張を許してくださるなら、私は、自分がライオンの顎に挟まれ、道なき密林へ運び去られていく人間のように感じていたのです。

1914 年 3 月以前、私は詩人・小説家として知られていました。

しかし 1914 年以降、私の名前は、自分でも数え切れないほど多くの国々で、「霊的現象に関わる人間」、つまり目に見える世界と見えない世界との通

信を仲介する者として知られるようになってしまいました。

私は、自分がその本を出版したことを後悔してはいませんでした。

なぜなら、多くの人々が、私の本によって絶望や、さらには自殺から救われたと手紙を書いてきたからです。

しかし、その本がもたらした世間の注目には、私は身をすくめていました。

私は、この本と、この本の読者たちによって、ほとんど食い尽くされそうになっていたのです。

1918年2月、私は、この出来事はもう終わったのだと言う権利が自分にはある、と感じました。

しかし、それは文通の終わりを意味しませんでした。

時間の制約や、不安定な健康状態——というのも、私は 1915 年以來ずっと体調が良くなかったのですが——のため、届いた手紙にすぐ返事を書くことができない苦しむ人々は、再び手紙を書いてきて、私が彼らの苦しみに無関心だと責めたのです。

状況は、想像を超えたものになっていました。

そして、もし私が一、二時間ほど社交的な「休息」を求めて外出したとしても、周囲には、『X』の本について、自分自身の亡くなった友人について、そして死者との交信の可能性について語ってほしいと望む人々が集まってきたのです。

私は苦しんでいる人々への憐れみに引き裂かれて

いました。

そして、長年の戦争の後では、ほとんどすべての人が苦しんでいました。

しかし私は、赤十字とともに前線へ行きたいと思っていました。

けれども、健康状態がそれを許しませんでした。

私はさまざまな戦争支援委員会を助けることはできましたが、傷つき苦しむ、愛するフランスへ行くことはできませんでした。

もし私が完全に倒れてしまえば、かえって重荷を増やすだけになるかもしれなかったからです。

この葛藤から逃れる唯一の道は、高度に抽象的な

研究、つまり純粋な精神が働くことのできる研究の中にありました。

そこで私は、1915 年以来多少興味を持っていた分析心理学を、本格的に学び始めたのです。

一年間、私は一日に十四時間ほど勉強しました。

ある時は教師について学び、またある時は一人で学びました。

私は三大学派の理論を深く掘り下げ、自分なりの方法でそれらを統合しました。

実験対象としては、かなり活発な精神を持っていました——つまり、私自身です。

いわゆる「抵抗」は、その教師によって打ち破られ

ていました。

私の理性にもっとも強く訴えかけたことの一つは、ユングが「非合理的なもの」の心理学的価値——つまり実際の価値——を強く主張していたことでした。

彼はこう述べています。

「人間の予見や哲学によって、自分の人生にあらかじめ決められた方向を与えることができる範囲は、せいぜいごく短い距離に過ぎない。

運命は私たちの前にあり、私たちを惑わせ、無数の可能性に満ちている。

しかし、その多くの可能性のうち、ただ一つだけが、私たち自身にとって本当に正しい道なのである。」

確かに、意志の力によって多くのことを達成でき

る。

しかし……私たちの意志とは、思考の力によって導かれる働きである。

そもそも、人生や運命が、人間の理性と調和している——つまり完全に合理的なものである——と証明されたことが、これまで一度でもあっただろうか。

あるいは、今後そのように証明されることがあるだろうか。

むしろ私たちには、それらが非合理的でもあると考える理由がある。

つまり、最終的には、人間の理性を超えた領域に根ざしているということである。

この大いなる過程の非合理性は、いわゆる偶然性によって示されている。

人生の豊かな蓄えは、法則によって定められているとも言えるし、定められていないとも言える。

それは同時に合理的であり、非合理的でもある。

したがって、理性と、それに基づく意志は、短い距離においてしか有効ではない。

私たちが合理的に選んだ方向を遠くまで押し広げれば広げるほど、それだけ人生の非合理的な可能性を排除してしまうことになる。

しかし、それらの可能性にもまた、生きられる権利があるのである。

実際、あまりにも厳格で意識的すぎる方向づけによって、私たちは自分自身を傷つけることさえある。

なぜなら、偶然から生まれる多様な可能性の豊か

さを、自ら断ち切ってしまうからである。

現在の恐るべき世界大戦という破局は、合理主義と文化をもっとも楽観的に支持していた人々さえも、激しく動揺させてしまったのである。

さて、私が理性的に選び取っていた「人生の路線」は、詩や小説や随筆を書くことでした。

しかし、「偶然性」がそこへ割り込み、私は自動書記を行い、それを書物として出版することになったのです。

その運命、その第二の人生の路線もまた、反対する証明ができない限り、「人間の理性を超えた領域」に基づいていたのかもしれませんが。

1914 年春、私が、社会的に高い評価を受けていた作家たちが自動書記作品を出版する流れの先

駆けとなったことが、歴史上もっとも恐ろしい大惨事の時代において、世界が霊的慰めを必要とするようになるという巨大な必要性によって、因果的に導かれていたのかもしれない——と、私は言いたくはありません。

それでは、非合理性をあまりにも押し広げすぎることになるでしょう。

しかし、ユングなら「第二の人生の路線」と呼ぶであらうその道は、1918年2月、この原稿の最後とともに、避けがたい終わりを迎えました。

その原因もまた、一見すると偶然に見えました。

ですが、この序文はあくまで序文にすぎません。

そのため、この十四か月のあいだに、私の精神の

橋の下を流れていった広大な川の中の、すべての水滴の流れを追いかけることは不可能なのです。

私の現在の人生の路線は——そして夢分析を通じて、私はそれが何であるかを知る手段を持っていますが——詩、小説、随筆といった本来の文学活動へ戻ることを指し示しています。

そして、できる限り、その道から私を逸らせるものを排除する方向へ向かっています。

「偶然性」は時折そこへ割り込んで来るでしょう。

場所の変化、したがって物の見方の変化、さまざまな研究、そして私がその一員である社会からの正当な要求などです。

しかし、私はもう十分な自動書記を行いました。

もしそれが必要なことなら、他の人々がそれを行うでしょう。

そしておそらく、それは必要なのです——なぜなら、それは現在の人類意識の状態において、塞いでしまうには危険かもしれない出口だからです。

もちろん、もし私が強い衝動を感じて自動書記を行うことになれば、私はそうするでしょう。

そして、その時には、私たちの理解を超えた原因の別名でもある「運命」を信賴するでしょう。

しかし、私の「内なる抗議」の強さこそが、その道を私はもう十分進み切ったのだと悟らせたのです。

以前の本の序文と同じように、私はその時点での心理的状況を述べ、「こういうことが起きた」と記しています。

読者は以前と同じく、自分自身の方法でそれを解釈するでしょう。

この序文は、1919 年 4 月時点での私の視点を示しています。

1919 年 5 月になる前に、私は生存継続の問題を解決しているか、あるいは——自分では気づかぬまま——それが解決不可能であることを証明しているでしょう。

こうした事柄について知れば知るほど、私たちは、自分がすべての知識を持っているなどとは考えにくくなります。

私たちはまるで子供のように、心理的な光と影の中を手探りしているのです。

私自身の不死への信念は、どうやら根絶しがたいもののようです。

私は、それが試されるまでは、そのことを知りませんでした。

しかし私たちは常に覚えておかねばなりません。

自分個人の信念は、それが真実であることの絶対的証拠ではない、ということ。

少なくとも、その信念のすべての心理的根源を調べ終わるまでは——そして現在の私たちの知識状態では、それはほとんど不可能なのです。

私たちの理性的信念というものは、もしそれを自分自身で形成したのであり、ただ無批判に先人や周

囲の人々の信念を受け入れただけではないなら、それは単に私たち個人による統合にすぎません。

しかし、その苦勞して獲得した統合に対してさえ、過大な価値を与えてはなりません。

それもまた、動き続け、絶えず変化するものだからです。

そうでなければ、私たちは成長できません。

人間は固定化した時から崩壊を始めるのです。

このシリーズの第一巻で、私は、自分がスピリチュアリズムにまったく興味を持っていなかったという事実を書きました。

意識の上では、確かにそうでした。

しかし今、分析心理学で言うところの「自我学派」

の中心人物であるアルフレッド・アドラー博士は、こう述べています。

「否定とはしばしば、無意識化してしまった古い関心の表現である。」

そうなのです。

私の父はスピリチュアリズムに深い関心を抱いており、私は幽霊が出ると言われていた古い家で生まれました。

母はその話題を恐れていました。

父は、私が十三歳の時に亡くなりました。

私はいつも、父を少し恐れていました。

私が初めてハッチ判事に会った時、私は彼に、「あなたは、かつての転生で私の父だったのかもしれませんがね」と言いました。

彼は微笑み、こう答えました。

「かもしれないね。」

顕微鏡学者であっても、私ほど事実に強い関心を持った者はいなかったでしょう。

私の科学者の友人たちは、「君の中には科学者が失われてしまった」と言います。

別の友人たちは、「あなたは偉大な霊的感受者だ」と言います。

そうして私は、そんな自分を見いだしたのです。

私は、靈的側面の現象を科学的側面とともに研究することで、それらを統合できる立場にいます。

教会の權威は、私たちの足元から崩れ落ちました。

二十世紀初頭を生きる私たち思考する人間は、感情の風に激しく揺さぶられる精神の海の上を漂流しています。

私たちは、ようやく世界的な兄弟愛を信じ始めました——その時、世界大戦が勃発したのです。

私たちの舵取り役は、海へ投げ出されてしまったかのようにでした。

誰もが、自分の隣人の判断を信用できず、自ら舵を握りたがっています。

混乱した魂たちが何千という単位で自動書記へ向かい、導きや、何か権威あるものを求めたとしても、不思議ではないでしょう。

子供時代には、親が私たちを導いてくれました。その後は、教会が私たちを導きました——あるいは、導こうとしました。

次に科学が私たちを導きました——少し行き過ぎるほどに。

そして、その反動の中で、私たちは内面へ向かいました。

すると、時には、無意識のほうが意識よりもさらに混乱していることを見いだしたのです。

しかし、これから続く「手紙」には、絶望はありません。

あるのは、光と勇気と希望だけです。

私たちの中には、大きく分けて二つの流れがあるように思われます。

精神的な流れと、本能的な流れです。

ベルクソンは『創造的進化』の中でこう述べています。

「知性だけが探し求めることのできるものがある。

しかし、知性だけでは決してそれを見つけることはできない。

そうしたものは、本能だけが見つけ出せる。

だが、本能はそれを探し求めようとは決してしない。」

建設的な探究心を持つ現代心理学が、過去および現在の宗教的信念へ注意を向けるようになったのは、避けられないことでした。

人々の心の中で実際に何が起きているのかを理解するには、それ以外に方法がなかったのです。

これら古い信念のいくつかは、検証の結果、科学的にも成立し得ることが分かりました。

たとえば、神智学者たちは——彼らはその考えをヒンドゥー教徒から得たのですが——進化には二つの流れがあると語っています。

元素的な流れと、人間的な流れです。

また、分析心理学におけるスイス学派の中心人物である C・J・ユング博士は、「エネルギー」の流れを二つの潮流に分けています。

一つは前進する流れ、もう一つは後退する流れです。

そして、この意志の二重性を、ブロイラーは「アンビテンデンシー(両向傾向)」と呼んでいます。

その違いは主として、表現方法や連想の違いにすぎません。

「常に、相反するもの同士の引っ張り合いがある。」

私は、これから続く「手紙」からこの言葉を引用します。

現在、世界を覆っている霊的潮流は、現代分析心理学を伴っています。

真実は、その統合の中に存在するのかもしれませんが。

ベールの向こう側から来たと称するものを何でも信じ、半ば目を閉じ、夢見るように「あなたはこうするでしょう」と語る、自称「霊的感受者」からのあらゆる示唆を受け入れてしまう人々の轻信——そうした幻想への渴望と、物質と物質の働き以外には何も存在しないとする唯物論者たちの否定との間には、中間の立場も存在しています。

分析心理学の偉大な先駆者自身も、最近の小冊子『War and Death(戦争と死)』——A・A・ブリル博士による翻訳——の中で、次のように述べています。

「無意識の中では、私たち一人ひとりが、自分自身の不死を確信している。」

では、もし無意識のほう正しいのだとしたらどうでしょうか。

ところで、「すべては愛である」とするクリスチャン・サイエンスの主張と、「すべてはリビドーである」とする精神分析学の本流の主張との間には、驚くべき類似性があります。

ユングなら、「すべてはエネルギーである」と言うでしょう。

ハッチ判事は、1905 年に出版した小冊子の中でこう書いています。

「私たちは、不滅の“力の単位”を想定する。それぞ

れが、一定ではあるが有限な量のエネルギーを生み出す力を持ち、その量は互いに同一ではない。私たちは、この単位における法則によって必然化された力の発生に、生命の基礎を置く。

生命とは、これらの単位同士が永遠に相互作用し合い、互いに働き合うことから生じる。ある時には潜在的であり、またある時には運動状態にあり、それぞれが発生させる力の量には限界があるが、その運動・現れ・特殊化の多様性には限界がない。」

真理は確かに一つなのかもしれません。ただ、そこへ至る道が数多く存在するだけです。

死者は私たちの中に生きており、そのようにして私たちに影響を与える」というフェヒナーの主張

は、人類全体の過去が無意識の深層に含まれているという仮説と結びつけるのに、それほど無理はありません。

もし分析を十分深く進めれば、その仮説は奇妙な現象によって裏づけられるのです。

現在という時代において——しかも今ほどその必要が大きい時代はありませんが——人間から不死への信念を取り去ろうとすることは賢明ではありません。

世界はあまりにも悲しみに満ちており、個人的不安が社会的無責任へ流れ込んでしまう危うい縁の近くにあります。

今、世界を覆っている霊的潮流は、あらゆる過剰補償がそうであるように、確かに行き過ぎた面を持

っています。

しかしそれでもなお、それは巨大な必要性に応えているのです。

軽信とは、疑いのもう一方の端に過ぎません。

スミス・イーリー・ジェリフ博士は、シルベラーの『Problems of Mysticism and Its Symbolism(神秘主義とその象徴の諸問題)』の翻訳序文の中で、こう述べています。

「人間の活動の中にある奇妙で異様なもの、そしてありふれたものの多くは、昇華作用の働きにおいて計り知れない価値を持つエネルギー変換を隠している。

人類は、それなしでは狂気に陥ってしまうだろう。

実際には、それがあってもなお狂気に陥ることがある。

それは、昇華がまだ不完全であり、人類が霊的に健全とは程遠いことの証拠である。

ここに関わる原理を理解することは、あらゆる思考形態に対する共感を広げる助けとなり、また、他者の必要や、昇華過程が取るさまざまな形への相互理解を通して、霊的健康を促進することにつながるだろう。」

ウィリアム・ジェームズはクリスチャン・サイエンティストたちを擁護しました。

そしてユング自身も、ロイ博士への有名な手紙の中で、こう述べています。

「目的に役立つのであれば、あらゆる方法は良いものである。クリスチャン・サイエンスやメンタル・ヒーリングなども含めて。」

この五年間、人間は客観的な事柄を恐れる理由をあまりにも多く経験したため、中世の時代以上に、主観的なものを恐れるようになってしまったのかもしれない。

H・W・フリント博士は、その優れた著書『Morbid Fears and Compulsions(病的恐怖と強迫観念)』の中で、次のように述べています。

「恐怖の生物学的機能、あるいは目的とは、防御であり、生存保持である。

今日生きている私たち一人ひとりは、人間以前の祖先も含めた祖先たちが“恐れていた”という事実のおかげで存在しているのである。」

ほとんどすべての人は、何かを恐れています。

崇高なジャンヌ・ダルクでさえ、火をひどく恐れていました。

(おそらく彼女は幼少期にひどいやけどを負い、その無意識の記憶が、純粹な魂の深みにおいて複雑にねじれ続けていたのかもしれませんが。

おそらく——あるいは別の理由かもしれませんが…
…。

私たちには永遠に分からないことでしょう。)

私たちが本当に「恐怖とは何か」を知った時、私たちは、祖先たちの思考を悩ませていた「一と多」の神秘を解き明かしていることでしょう。

恐怖とは、未知であり、知り得ない「非自己」の巨大さの前で、自我が自らの無力で小さな存在を意

識する瞬間的な高まりなのかもしれません。

兵士の向こう見ずな勇気は、過剰補償であり、勝利的な昇華なのかもしれません。

そしてそれは時に、その強さに応じて、隠された、あるいは隠しきれない反動を伴います。

なぜなら、シルベラーが述べているように、

「葛藤は実際には外界に存在するのではなく、それに対する私たちの感情的態度の中に存在する。もし私たちが内面的成長によってその態度を変えるなら、外界は異なる価値を持つようになる。」

人間は確かに、自らの宇宙であり、大宇宙の縮図です。

そしてその程度は、「投影」という現象や、昇華を含

む補償作用を、自分自身の中で知的に研究したことのない者には理解できないほど深いものなのです。

あらゆる時代の偉大な神秘家たちは、内向化を通してこれを発見し、自分たちなりの方法で一つの学問体系へとまとめ上げました。

そしてユングやシルベラーのような現代の偉大な科学者たちもまた、その体系が深い研究に値すると認めたのです。

ブリュッセルのドウェルハウヴェルス教授は、神秘主義についてこう述べています。

「神秘的合一の効果は、論理的であり、一貫性を持っている。

さらに、恩寵の領域に属する行為の第二の性質

は、その積極的な寄与、すなわち、それによって恩恵を受ける人々の霊的生命にもたらされる増大である。

神の観念、神聖なる存在感、あるいはその他いかなる靈感の形であれ、それは宗教的人間の精神にとって、科学者における長く探し求めていた解答の突然の着想や、芸術家における、自ら熟考し、忍耐と執念をもって構築し続ける作品の幻視と同じほど自然なものである。

神による魂への侵入も、神秘家たちの“帰還”も、精神崩壊とはまったく似ていない。」

神を取り除くことは、容易ではありません。

コンスタンス・E・ロング博士編集の『Collected Papers on Analytical Psychology(分析心

理学論文集)』の中で、ユングがこの主題について述べていることを読んでみてください。

「神という概念は、単に必要不可欠な心理機能なのである。

人類共通の感覚は、過去何千年もの間、神々について語ってきたし、これから何千年もの未来においても語り続けるだろう。

人間は、自分の理性をどれほど美しく完璧だと思おうとも、それが精神機能の可能性の一つに過ぎず、宇宙現象の対応する一側面と一致しているだけだということを認めるべきである。

周囲には、理性と一致しないもの、すなわち非合理的なものが満ちている。

そしてこの非合理性もまた心理機能であり、それは絶対的無意識である。

一方で、意識の機能は本質的に合理的である。」

古代のヘラクレイトス——実に賢明な人物だったが——は、あらゆる心理法則の中でもっとも驚くべき法則、すなわち対立物の調整機能を発見した。

彼はこれを『エナンティオドロミア(対立物の衝突)』と呼んだ。

それによって彼は、すべてのものはいずれその反対物と出会う、という意味を表したのである。

人間は、自分自身を理性と同一視してはならない。

なぜなら、人間は完全に合理的な存在ではなく、また今後も決してそうはなれないからである。

これは文明のすべての哲学者が注意すべき事実である。

非合理的なものは、根絶することもできなければ、根絶してはならない。

神々は死ぬこともできず、死なせてはならない。

合理主義によって天界を消毒してしまった人々には災いあれ。

彼らが神を絶対的機能として認めようとしなかったために、神の全能性が彼ら自身の中へ入り込んでしまったのである。

エナンティオドロミアという残酷な法則から逃れられるのは、無意識から自分自身を切り離す方法を知っている者だけである。

ただし、それは抑圧によってではない。

抑圧すれば、無意識は背後からその人を捕えるからである。

そうではなく、自分とはまったく異なる何かとして、それを目に見える形で自分自身へ示すことによってである。

人は、自分の思考の中で、自我とは何か、そして非自己とは何かを区別することを学ばねばならない。

後者は集合的精神、あるいは絶対的無意識である。

心理的自我を心理的非自己から区別するためには、人はまず自我機能の中にしっかり立っていないなければならない。

宗教というこれほど強力な機能を軽視し、抑圧することが、個人の心理に深刻な結果をもたらすことは明らかである。

ある時代の懐疑主義は、フランス革命の恐怖によ

って終わりを迎えた。

そして現在、私たちは再び、集合的精神の無意識的で破壊的な力の噴出を経験している。
その結果が、前例のない大虐殺である。

まさにそれこそが、無意識が向かおうとしていた方向だったのである。

この傾向は、それ以前に、現代生活の合理主義によって異常なほど強められていた。
合理主義は、あらゆる非合理的なものを軽視したため、非合理性の機能を無意識の中へ沈めてしまったのである。

実際には、非合理性を、必要かつ常に存在する心理機能として認める以外に、取りうる道は存在しない。

その結果は、具体的現実として受け取られるべきではない。

(もしそうすれば、それは抑圧を伴うことになる。)

しかし、それらは心理的現実として受け取られるべきである。

なぜなら、それらは働きを持つもの、すなわち現実
に作用するものだからである。

だから私たちは、祈ることを恥じる必要はありません。

歴史のこの陰鬱な時代——魂が、自分自身および
兄弟たる他者と、かつてないほど真正面から向き
合っているこの時代——において、私たちは、戦争
前の形式的な微笑みに満ちた時代よりも、もっと単
純に語ることができるのです。

私は祈ります——そしてあなたも、あなたが誰であれ、苦しみの中で「おお神よ！」とうめく時、祈っているのです。

祈りとは本能です。

たとえ無神論者であっても、人間の助けを超えた状況に置かれれば祈るでしょう。

前線で戦死した私の友人は、毎朝聖体拝領を受けていました。

そして、それによって彼は、間違いなく、より健全で、より優れた兵士になっていたのです。

その信仰行為の美しさを理解するために、ローマ・カトリック教徒である必要はありません。

神が「超個人的無意識の支配的要素」であろうと、

心理機能であろうと、数学的方程式であろうと、私にとっては少しの違いありません。

ウィリアム・ジェームズなら、「それは働く」と言うでしょう。

そして、死者の魂がフェヒナーの言うように私たちの中で生きているのか、あるいは個人的・集合的無意識の中の残留物なのか、あるいはアストラル的・エーテル的物質を用いて物質化できる「具体的現実」なのか——それもまた、私にとってはまったく違いになりません。

もしあなたが、この問題全体について、私がどれほど完全な平安の中にいるかを知ることができたなら！

さらに、多くの相違も、注意深く調べてみれば、主

として視点や表現方法の違いに過ぎないことが分かります。

中世および現代の神智学者たちが語る「アストラル界」は、無意識のある層に対応しています。

『X』は、これから続く 1917 年に書かれた手紙の一つの中で、憂鬱は、私たちに恐怖を与える不幸な死者たちの圧力によって生じることがある、と述べています。

もし死者を、受動的な瞬間に湧き上がってくる無意識の中へ位置づけるなら、死者は同じ作用を持つことになります。

私は、骨の折れる人生の余暇の多くを、多数の異なる学派によって体系化された神秘主義およびオカルティズムの理論と実践の研究に捧げてきまし

た。

そのため、もしその気があれば——もっとも、私はその気はありませんが——これらの事柄の心理的根源や相互関係をたどるだけで、何冊もの本を書くことができるでしょう。

私自身の無意識は、そのようなイメージに満ちています。

もっとも驚くべき類似点のいくつかは、私の知る限り、まだ書き記されていません。

そしてユングは、予知夢を信じる人々の弱ささえも、その広大な理解のマントで包み込んでいるように見えます。

彼はこう述べています。

「無意識は、意識には完全に閉ざされている知恵の可能性を持っている。

なぜなら無意識は、忘れられたり見落とされたりして閾値の下に沈んでいるすべての心理内容だけでなく、計り知れない時代の経験の知恵——時の流れの中で蓄積され、人間の脳の中に潜在している知恵——をも自由に利用できるからである。

無意識は絶えず活動しており、その素材を組み合わせ続けている。

それらは個人の未来の道を示す役割を果たす。

無意識は、私たちの意識が行うのと同じように未来志向の組み合わせを作り出す。

しかし、それらは精妙さにおいても広がりにおいても、意識による組み合わせをはるかに上回っている。

したがって、無意識は人間にとって比類なき案内者となり得るのである。

無意識には、まだ意識の水準へ到達していないすべての素材が含まれていなければならない。それらは未来の意識内容の芽なのである。」

彼は、本当の予言とは、未来の出来事にとって重要な傾向——それが個人的無意識であれ集合的無意識であれ——を、無意識が統合した結果に過ぎないと考えているようです。

メーテルリンクの「より高次の無意識 (inconscient supérieur)」に言及しつつ、彼は夢の予言的解釈についてこう述べています。

「この種の思考過程——それは幻想的とさえ呼びがたいものである——に対する厳密科学の嫌悪

は、何千年も昔から続く、人間の“占いを信じたがるあまりにも強い傾向”への過剰補償に過ぎないのである。」

私は、入眠直前の半覚醒状態で声を聞くことは、「軽度の解離傾向」を示しているのだと説明されています。

それで結構です。

おそらくその声は、自動書記の靈感が何であれ、自動書記よりさらに深い層から来ているのでしょう。

さて、これから続く手紙の中で『X』が、アメリカが参戦する前にアメリカへ助言していた事柄は、実際にアメリカが参戦後に行ったことそのものであり、しかも戦時措置としてでなければ実行不可能だったことでした。

しかし、アメリカの参戦そのものについては、これらの手紙の中に具体的な予言として書き留められてはいませんでした。

どんな衝撃的な予言であっても、それは常に、自動書記が可能となる受動状態から私を引き戻してしまう傾向があったのです。

しかし——1917年2月から4月までの数週間の間、眠りに入る前の半覚醒状態で、私は何度かこう聞きました。

「私たちは戦争へ入る。」

もちろん私は、それを原稿には書きませんでした。なぜなら、それは原稿の一部ではなかったからです。

聞こえたものは聞こえたのであり、書かれたものは書かれたものなのです。

私はこれを、単なる興味深い現象として述べているに過ぎません。

というのも、それはおそらく、私の無意識のより深い層による統合だったからです。

それは確かに、私の意識的精神の悲劇的な希望でもありました。

しかし、意識だけでは声を生み出すことはなかったでしょう。

もし誰かが、私が半覚醒状態での声を聞いたことを認めるのを不思議に思うなら、私はただ、自分がこれらの事柄をかなり客観的かつ非個人的に見ているのだと言うしかありません。

私は、半分眠っている時以外には決して声を聞きません。

もし私の非常に正確な記憶に狂いがないければ、ウィリアム・ジェームズも、自身の半覚醒状態での体験について自由に語っていたはずです。

私たちは、自分という小さな人格について知れば知るほど、それが怪物的なほど重要なものには思えなくなります。

そして「声を聞く」という現象は、モーセ以前にも以後にも、歴史の中で何度も重要な役割を果たしてきたのです。

しかし私は、自分に何らかの予言者としての使命があるとは思っていません。

また、「神性の大海と一つになろう」と急いでいるわけでもありませんし、普遍的なものへ背を向けようという衝動も感じていません。

人生における効率、健康、理解をもたらす幸福な中道というものが存在するのです。

私はこの序文の中で分析心理学に触れました。それは、私という人間が、この最後の自動書記作品集を出版するにあたり、以前の序文と同じ率直さで、自分の立場を示さずにはいられない性質だからです。

どうか、分析の過程を経てもなお、私が個人の不死に対する本能的信念を失わなかったからといって、科学を責めないでください。それは決して科学のせいではないのです。

もし誰かが、私がこの本の主題へとつながる巨大な心理学の網の糸に、ほんの少し触れただけだと異議を唱えるなら、私はただ、この前書きはあくまで本書の序文である以上、紙幅と芸術的関連性の制限のため、それ以外の方法は不可能だったのだと言うしかありません。

ヒーリングの方法としての心理学については、私はそれを医師たちに任せます。

彼らは、その主題について、多くの文献一覧を含む本を書いています。

また、書店には目録もあります。

興味のある方は、そこへ問い合わせればよいのです。

これは、私が問い合わせの手紙への返答を控えることへの弁明でもあります。

私は、無私の努力をもって、何百通もの手紙を書いてきました。

しかし今、私は別のものを書きたいのです。

心理的「コンプレックス」の解消は、仕事における昇華のためにエネルギーを解放します。

それは、芸術に用いるための思想を解放するのです。

ベアトリス・M・ヒンクル博士は、ユング著『Psychology of the Unconscious(無意識の心理学)』の翻訳序文の中で、このように述べています。

「この心理学は、あらゆる思想領域へ浸透しており……人間生活の理解と实际的進歩のための、心理学的・哲学的体系となる運命にあるように思われ

る。」

そこで私は、その水が爽やかだった井戸を見つけた者として、その事実を記し、先へ進むのです。

読者がこの序文の中でたどってきた思考の流れこそが、多少の遅れはあったにせよ、私をこの本の出版へ導いた思考の流れなのです。

私は、この『Last Letters from the Living Dead Man(生ける死者からの最後の手紙)』が、勇気への呼びかけ、自制への呼びかけ、そしてアメリカと世界の偉大で秩序ある未来への信頼への呼びかけとなっていることを嬉しく思います。

それは、平和再建の日々において切実に必要とされている、あらゆる積極的な資質への呼びかけなのです。

というのも、私は、ボルシェヴィズムや、その他いかなる狂気の形態も、アメリカ合衆国に根を下ろすことはないと思っているからである。

男女双方に普通選挙権を持つ国家には、狂氣的破壊へ走る動機など存在しない。

前回の州選挙運動において、女性たちが選挙権の特権と義務に対してどのように反応したかを見るのは興味深かった。

私は民主党内でしかそれを観察していないが、おそらくどこでも同じだっただろう。

そこには、より大きな威厳、新たな責任感、そして女性と男性の間の礼儀と真の仲間意識が存在していた。

それが、第四次自由公債運動や戦死者名簿の公表と時期的に重なっていたことは、なおさら意味深いことであった。

いや、これらの冷静で社会的責任感を持つ女性たちは、決して集団的狂気に飲み込まれることはないだろう。

そして、前線から帰還する男性たちは、母であり、妻であり、姉妹である彼女たちのもとへ帰って来るのだから、私は、戦争によって得たものを平和によって失うことはないと考えている。

そして今——この本が1917年2月から1918年2月の間に書かれたものであることを常に心に留めながら——あなたは『Last Letters from the Living Dead Man』を読むことができます。

ELSA BARKER

1919 年 復活祭の日

ニューヨーク

LETTER I

第一の手紙

THE GENIUS OF AMERICA

アメリカの靈的指導存在

1917 年 2 月 3 日

私はアメリカについて書きたい。

私の最新の誕生の地、未来の地について。

アメリカの靈的指導存在が進むことのできる道は偉大であり、その足はすでにその道の初期段階を通り過ぎている。

アメリカの靈的指導存在！

それぞれの国には見守る存在があり、その子らは

導かれている——導かれ、動かされている——霊
的指導存在によって。

もしあなたがアメリカの霊的指導存在を感じたい
なら、夜、一人で森へ行きなさい。
見つめ、耳を澄まし、呼びかけなさい。

すると、おそらく応答が来るだろう。
その存在があなたを認識し、あなたがその存在を
認識するのだ。

もしあなたが、偉大なる存在たちが沈黙の中で語
る言葉を聞くことのできる者の一人なら、おそらく
あなたは魂の耳で何かを聞くだろう。

もしそうなら、そのメッセージを急いで公表しては
ならない。
それを心の中に大切にしまっておきなさい。

なぜなら、心の中に大切に保たれたものは、時として他者の心にも感じ取られ、理解されるからである。

もしあなたが、自ら進んで奉仕する者の一人なら、あなたの心の秘密は、沈黙の中で聞くことのできる者たちと、沈黙のうちに共有されるだろう。

この国の使命が現れる時が近づいている。
この国の霊的指導存在が、その意志をこの国に強制する時が近づいている。

それは容易な仕事ではないだろう。

あまりにも多くの意志が、導く手から手綱を奪おうとしてきた。

あまりにも多くの目が、それぞれ異なる方向を見つ

め、それぞれ異なる目標を見てきた。

しかし、一つの意志が存在する。

それは非常に強力であり、その時が来れば、強風が散らばった藁の束を巻き上げて押し流すように、人々の意志を集めて運び去ることができる。

あなた方は、神を背後に持つ意志の力を知らない。

あなた方は、神を背後に持ち、未来を前方に持つ目的の力を知らない。

この国の霊的指導存在の前に立ちはだかる者たちは、風に逆らおうとする藁のように碎かれるだろう。

私は、見えない場所から、多くの人々の働きを見守

ってきた。

私は見えないまま、自らの信念によって、多くの
人々の心を強める助けをしてきた。

私は今、運命の行為が成就するまで、見えないまま
待つことにしよう。

新しい生命の薄明かりの中で、まだ明瞭さが訪れ
る前の、私の最初の手探りの歩みから私について
来たあなた方よ。

世界の内側と上方の両方に存在する戦場を巡る私
の旅に従って来たあなた方よ。

どうか、もう少しだけ私について来なさい。

私があなた方へ語ろうとしている真理、あなた方へ

与えようとしている助言が入り込めるように、心を少し開いたままにして。

なぜなら、私の助言は雨のように私心なく与えられ、私の真理は光のように自由に差し出されるからである。

私は、ほんの数年前に肉体を脱ぎ捨てて以来、長い道のりを進んできた。

その年月は短くも密度の濃い年月であり、その間に世界は私と同じほど速く動き、時には私以上の苦痛を伴って進んだ。

なぜなら、自分の苦痛の目的を知っている者は、ただ苦しんでいることしか知らない子供よりも、その苦痛に耐えやすいからである。

私はもっと早くあなた方へ語るべきだった。
しかし、あなた方がそれを許さなかったのだ。

子よ！

あなたは、自分個人の願望や、また別の種類の願望である“ためらい”によって、道を塞ごうとするのか？

あなたがこの仕事を避けようとする意志によって妨げられたため、私は別の入口を探した。

しかしそこは、偏見や先入観、そして教義に縛られた場所で長年暮らすことで積み上がった、精神の断片という雑多なガラクタによって、あまりにも塞がれていた。

多くの天幕に短く住んできただけのあなたには、扉

の前を塞ぐものは存在しない。

あなた自身の意志によって置かれたものを除いては。

そして私は今、それらを払いのける。

私は出入りし、自ら望むようにあなたへ語るだろう。

LETTER II

第二の手紙

FEAR NOT

恐れるな

1917 年 2 月 8 日

私は、何か月も前に、エイブラハム・リンカーンの魂が、この国——彼が分裂から救うために命を捧げたこの国——の上で見守り続けており、そしてアメリカが次なる大試練を通り抜けるまで、その警戒を続けるだろう、とあなたに告げなかっただろうか。

その時あなたは、その試練とは何なのかと疑問に思った。

今も疑問に思うのか？

だが、それでもなお、あなたはまだ知らない。

ゆっくりと月日は過ぎ去り、過去へと退いていった。

1915 年の春、あなたは幻視の中で、尖った兜をかぶったドイツ皇帝が、シャツ姿のアンクル・サムと向かい合って立っているのを見た。

その時、あなたは事態がこのようになると予想しなかっただろうか。

あなたがそのような幻視を自分だけのものとして保っていたのは賢明だった。

この戦争が、世界がこれまでに知らなかったほどの大きな変化なしに終わるなどと考えてはならない。

ほぼ二年前、私が、善と悪の力の戦いはすでに見えない領域において勝利しているとあなたへ語った時、私はそれを知っていた。

なぜなら、私の教師がそう告げたからである。

しかし、新しい時代が、今あなた方に想像できる以上の大きな苦しみと大きな変化なしに訪れるなどとは考えないことだ。

誕生とは変化であり、誕生とは苦痛を伴う。

そして誕生とは血にまみれ、消耗するものでもある。

これまでに起きた苦痛は、ただ陣痛に過ぎない。

その軌道の中で、星々は新しい人類のために戦っている。

私はヨーロッパの血塗られた戦場について書いてきた。

今度はアメリカと、その未来について書きたい。

近い未来、そして遠い未来について。

なぜなら、太陽は東の地平線へ近づいており、夜明けの雲はすでに来たるべき日の色に染まり始めているからである。

アメリカよ、絶望してはならない！
あなたの運命は保証されている。

これから来る嵐の中では、嵐の後の新鮮さを思い出しなさい。

大地が甘い香りを放ち、鳥たちが歌う時を。

なぜなら、鳥たちは新しい時代の子供たちのために
歌うことになるからだ。

変化のただ中には、一時的な静まりが訪れるだろ
う。

その時、世界はこう言う。

「すべて終わった。昔のものが戻って来る。そして、
すべて以前と同じになるだろう。」

しかし、何一つ、以前とまったく同じには戻らない。

その静まりの中で、あなた方は息を整え、次なる変
化への備えをすることになる。

そうだ、多くのものが変わる。

人々の心さえも変わるのである。

世界は恐怖を知った。

恐怖を経験することなしには、また恐怖に屈せず立ち向かうことで得られる落ち着きなしには、世界は未来に失敗せず向き合うことはできなかつただろう。

三十か月の戦争の後、今や世界を驚かせ得るものが存在するだろうか。

世界が立ち向かえないものなど存在するだろうか。

ああ、あなた方が不滅であることを忘れてはならない。

そして、この人生を去るあなた方は、見えない世界での休息によって力を得て、再び戻って来るのだと

いうことを。

なぜなら、場所の変化とは、意識の休息だからである。

神経が疲れ切った者に対して、賢い医師たちは環境の変化を勧める。

見えない世界での休息は、山で過ごす夏よりも、さらに爽やかなものなのだ。

死を恐れてはならない。

私は死を通り抜けた。

そして今、私は、朝の強健な男よりも、さらによく休めている。

私は以前の肉体へ戻りたいとは思わない。

再び肉体が必要になった時には、新しいものを作るつもりだ。

私はその作り方を知っている。
これまでに何度も作ってきたからである。

私とともに喜びなさい。

ある賢者は、耐えられないものだけが真に悲劇的なのだと言った。

世界も、世界の魂たちも、これから訪れる変化に耐えることができる。

戦争が、それへの備えをさせてきたのではないか。

だからこそ、戦争は必要だったのである。

アメリカは豊かである。

その金庫は黄金で満ち、その鉱山は鉱石で満ち、
その新鮮な土壌は豊穡さに満ちている。

労働によって肉体に必要なすべてを得られ、信仰
によって魂に必要なすべてを得られる未来を、なぜ
恐れる必要があるのか。

この国の歴史とは、信仰の歴史である。

コロンブスは、ただ信仰という星に導かれて、道な
き海へ漕ぎ出したのではなかったか。

あなた方の祖先たちもまた、未来への信仰に導か
れて後に続いたのではなかったか。

過去は神のもとへ帰った。

それは死者のように安全である。

しかし未来は、あなた方のもとへ向かって来ている。

そして、あなた方の信仰が、それを確かなものにするだろう。

何も恐れるな。

この国の初期の時代、あなた方の祖先は静かに眠っていた。

赤い肌の男たちが森に潜み、飢えが凶作の中に潜み、木を切って燃料にしなければ、人も子供も冬を暖かく過ごせなかったにもかかわらず。

そして今、あなた方は石炭不足を恐れているの

か？

大地は石炭で満ちている。

あなた方は小麦不足を恐れているのか？

その一方で、運動不足によって筋肉は太っている
ではないか。

最初にこの地へ来た人々には、恐れる理由が数多
くあった。

しかし、あなた方には恐れる理由など存在しない。

労働は甘美なものである。

遊びを労働として行う子供は、その言葉の真実を
証明できる。

ならば、あなた方は労働を遊びに変えることができるのか？

私が子供だった頃、私は積み木で家を作っていた。

私は何かを建てることを切望していた。

庭で溝を掘り、木片で船を作り、水たまりに浮かべて遊んだ。

私は種を植えた。

そして学問はどうか？

世界の図書館や、人々の頭脳の中には、長い時代の知識が蓄えられている。

新しい時代においても、すべての時代の記録が失われることはない。

紙は羊皮紙ほど長持ちしないとはいえ、それでも新しい時代まで残り続けるだろう。

恐れるな。」

私はほのめかしによって、多くの変化が訪れることをあなたの心へ伝えている。
だから何だというのか。

すべての進歩は変化なのだ。

微笑みを顔に浮かべ、歌を唇に乗せて、未来を迎えに出て行きなさい。

未来は、そのボタン穴に一輪の薔薇を差している——あなたの Vagrom Angel が言うように。

LETTER III

第三の手紙

THE PROMISE OF SPRING

春の約束

1917 年 2 月 17 日

あなたが人生を、一つの全体として考えることを学び、その全体の一部である自分自身の中に、その全体の可能性が含まれていると理解するようになれば、あなたはこれらの大きな変化を喜びをもって見るようになるだろう。

“一なるもの”は、時として、それ自身のためにそれ自身を犠牲にしなければならない。

そして、不要なものを取り除くことによって、新しい

生命の延長を確保するのである。

その全体——それを人類と呼ぼうと、地球の霊と呼ぼうと、好きなように呼べばよい——は、時として太りすぎ、怠惰になりすぎることもある。

それは、人が身体が大きくなりすぎて、容易に動けなくなるのと同じである。

すると、器官同士の争いによって、熱病によって、断食によって、あるいは治療によって、均衡が回復され、彼は再び新しい人間として立ち上がり、未来へ向かう準備を整える。

それは陰惨に思えるか？

しかし、人生の目的が常に微笑みに満ちているなどと、誰があなたに言ったのか。

地球の深みの中にも、人間の深みの中にも、暗い物質が存在している。

冬の寒さは、自然に身をさらす者にとっては厳しいものである。

しかし冬とは、生命という変化する海の引き潮であり、その満ち潮が夏なのだ。

リズム——常にリズムである。

私は、人類の冬によってあなたを落胆させたくはない。

なぜなら春はやって来るし、薔薇は再び咲くからである。

三月の風！

その後には四月の雨と五月の花が続く。

私たちは今、二月にいるのだ。

空が暗くなり、雪が降る時、私たちは火の周りへ集まり、未来について考える。

花々が再び咲き、緑の草が地を覆い、鳥たちが木々の中で歌う時について。

太陽は、風の吹く三月に「境界線を越え」、牡羊宮へ入る。

そして黄道帯は、偉大なる光の与え手である太陽によって、再び巡られていく。

春分が近づく時、あなたは震え上がり、恐れを抱くのか？

魂にもまた、物質主義という冬と、理想という春が存在する。

私は世界を外側から見た。

そして、絶望すべき理由は見当たらない。

私は魂を内側から見た。

そして、大いに喜ぶべき理由を見ている。

あなた方は戦争の終わりを待ち望んでいる。

しかし魂は、その旅の終わりまで戦わなければならない。

魂が物質に包まれている限り、戦争は尽きることがない。

なぜなら、もっとも大きな戦いとは、魂が自分自身と戦うことだからである。

私は以前にもこれをあなたへ語った。

時として魂は外へ向かって戦い、また時として内へ向かって戦う。

剣が鞘の中で錆びつくことはない。

自分自身について考えることを減らし、人類について考えることを増やさない。

部分ばかりを近く見すぎること、あなたは全体のヴィジョンを失っている。

その部分の一つに過ぎない自分自身を、あまりにも近く見つめすぎているのだ。

自分を人類そのものとして考え、人類を自分自身として考えなさい。

そうすれば、自分自身は人類となり、人類は自分自身となる。

「宇宙は“私”となる。」

かつて、非常に偉大な神がいた。
その身体の細胞たちは、小さな神々だった。

あなたもまた、それほど偉大になることができる。
その時、あなたの身体の細胞たちは、あなたの幸福
のために自らを犠牲にすることを喜ぶようになるだ
ろう。

生きたいという意志を放棄することによって、あな
たは自らを不滅にすることができる。
喜びを求める意志を放棄することによって、あなた
は本当に喜びに満ちた者となることができる。

かつて私は偉大な人物になりたいと願っていた。

しかし今、私がただ「人類が偉大であってほしい」と
願うようになった時、私は自分自身の大きさを増し

たのである。

かつて私は愛されたいと願っていた。

しかし今、私が自分自身のためではなく、愛そのもののために愛する時、私は多くの人々から愛されている。

確かに私は、自分の生命を失うことによってそれを見いだした。

そして、師の言葉は正しかったのである。

私は、かつて自分の庭を見下ろしていたように、今は世界を見下ろしている。

私は草が芽吹いているのを見て、地中に種があることを知る。

私は人々の心の中へ種を植えた。

それらは芽を出し、陽光へ向かって伸びていくだろう。

なぜなら、私は春を信じていたからである。

しばらくの間、私はヨーロッパをそのままにしておき、もっとも愛するこの国へ戻って来た。

私は州から州へ旅をし、私たちの立法者たちの意志を見守ってきた。

彼らもまた、自分たちを通して一つの力が働いていることを感じ取っている。

彼らは、自分たちの立場の責任を感じている。

彼らは、自分たちを「アメリカ」という名を持つ大きな全体の動く一部分として感じている。

国旗は、彼らの献身の象徴である。

私は森を歩いた。

そこでは、この土地の霊たちが、新聞には報じられない協議のために集まっている。

彼らもまた、自らの献身を理解している。

彼らは、その信念によってあなた方を強めている。

私がアメリカで人間として生きていた時、私はアメリカを知らなかった。

故郷の意味を知るためには、私たちは旅をしなければならないのだ。

今の私は、完全に統一の側に立っている。

部分への恐れによって、自分たちを弱めてはならな

い。

アメリカは一つの全体であり、全体として働かなければならない。

この多くの人種を融合させることこそ、現在の時代の使命である。

分裂へ心を貸してはならない。

私は、この国に現れる偉大な指導者を見る。

彼の使命は、人種の統合である！

彼は教師となり、預言者となるだろう。

LETTER IV

第四の手紙

THE DIET OF GOLD

黄金の食事

1917 年 3 月 10 日

現在この国を分裂させようとしているまさにその影響力が、後にはこの国を一つへ引き寄せることになるだろう。

多くのものは、「一なるもの」の中にその接点を見いだすことになる。

国家的統一という理念は育まれなければならない。

たとえばそれが、人種ごとの気質に対する忍耐強い

寛容を必要とするとしてもである。

古い民族性から切り離され、新しい民族へ融合していく過程にある人々は、その変化の緊張を感じている。

それは彼らを苛立たせ、彼らの血は抗議する。
たとえ彼らの意志が、自分たちのために新しい絆を築こうとしていたとしてもである。

「ハイフン付きアメリカ人(〇〇系アメリカ人)」のうち、肉体ごと昔の忠誠対象へ戻りたいと望む者は、ほとんどいないだろう。

アメリカは、あらゆる国の中でもっとも興味深い国である。

そして、こちら側——空気の国境のこちら側——からそれを見る私たちは、それを歴史的遠近法の中

で見ている。

私たちの視点にもっとも近い見方をしているのは、
あなた方の現在の最高指導者である。

彼の目は遠くを見通している。

彼は、自らの仕事を終えた時に得ることになる、さ
らに明瞭な視野を、すでに予感しているのである。

私たちの国は、今この瞬間——西暦 1917 年 3 月
——黄金の消化不良に苦しんでいる。

あなた方は、自分たちが消化できる以上の黄金を
飲み込んでしまい、その器官は充血している。

もし均衡を回復するために、その黄金の一部が、
戦争やその他の手段によって吐き戻されることにな
ったとしても、その後に訪れる疲弊の中で、「国

家が死につつある」などと思ってはならない。

私の比喩表現に衝撃を受けてはならない。

私は、事実や現状を、あるがままに理解する感覚を、あなた方の意識へ入れたいのである。

あなた方は黄金を食べて生きることはいできない。

「黄金とは交換の媒介物である。」

それが単に蓄えられるだけになった時、それは生命との関係を失ってしまう。

守銭奴の国家は、その長い爪と貪欲な目を持つ守銭奴の男よりも、さらに悲しい観察対象である。

守銭奴の男は、黄金そのもののために黄金を蓄えることで、未来の危険から自分を守れると考えるか

もしれない。

守銭奴の国家もまた、黄金そのもののために黄金を蓄えることで、この戦争の年月の後に世界を脅かす金融上の危険から、自分を救えると考えるかもしれない。

しかし、守銭奴として知られている者は、盗まれ、殺される危険にさらされる。

そして守銭奴の国家もまた、他国から攻撃され、略奪される危険にさらされるのである。

あなた方アメリカ人は、家を失い、食糧を失ったヨーロッパの人々に対して寛大でありたいと願っている。

しかし、あなた方の寛大さは、まだ「アメリカ」という一億の頭を持つ存在から、一食分の食事すら奪っ

てはいない。

私は、あなた方が黄金をどう扱うかについては、それほど気にしていない。

しかし、あなた方が食糧をどう扱うかについては、大いに気にしている。

あなた方は錬金術師ではない。

黄金を飲めるものへ変えることなどできないのだ。

あなた方は繊細な胃を持つ人間なのである。

よく餌を与えられていなければ、雌鶏でさえあなた方のために卵を産まない。

もし彼女が反抗するなら、あなた方は彼女を食べることで罰することができる。

しかし、どれほど幸運に彼女の叉骨を折ったとして

も、そこから別の雌鶏が生まれることはない。

それよりも、穀物を与えることで彼女の労働力を保護し、朝食用や孵化用の卵を得るほうが良い。

彼女には、じっと座っていたがる怠惰な時期もある。

しかし、彼女自身の卵をいくつかその下へ置いてみなさい。

そして結果を見守るのだ。

後になれば、私はあなた方へ、朝食を確保するための、別の——しかし同じくらい実地的な——方法について語るだろう。

LETTER V

第五の手紙

CONTINGENT FEES

成功報酬

1917 年 3 月 10 日

今日私は、ある裕福な男について耳にした。
(ラクダと針の穴の話など気にも留めていない男である。)

その男は、「この Living Dead Man(生ける死者)からの手紙」があなたに利益をもたらしたのだ
と思い込み、そこには「金になる要素」があると考えていた。

そして彼は、あるミディアムを金銭的に支援すべき

かどうかを検討していた。

そのミディアムは、自分が私と交信しているのだと宣言する用意ができていた。

そして、あなたを通して書かれた本を私は否認しており、自分を通して書かれたある原稿こそが、本物の、唯一真正な世界へのメッセージであると、私自身が保証しているのだ、と主張する準備を整えていたのである。

私は、あなたがたの笑いに加わる。

あなたが「あの世の証券」へ行った supposedly “利益になる”投資についての笑いに。

そして、乗船料も払っていない人々が、エーテルの海を渡れる船へ飛び乗ろうと熱心になっていること

への笑いに。

今ここで言うておこう。

この国や他の国々には、私からのものとされる「通信」が散乱している。

どうやら私の“書く腕”は、ムカデの足ほどにも数多く存在しているらしい。

さらに、それらの「私からの通信」とされるものの文体や内容、そして互いに矛盾している点を見る限り、私はインドラの目ほどにも多くの精神を持っているらしい。

ウィジャ盤の精霊たちでさえ、これらの代筆者たちが私にさせているほど頻繁には、自分自身を矛盾させたりはしない。

どうやら、あなたは私を商標登録しなければならないようだ。

最近の私の手紙の深刻な内容の後では、冗談を言うことが私をくつろがせてくれる。

もしあなたがこの手紙を本に収録するなら、「成功報酬」という題を付けてほしい。

LETTER VI

第六の手紙

THE THREE APPEALS

三つの呼びかけ

1917 年 3 月 11 日

私は世界の外側に立ち、人々の心の内側を見つめている。

そして私は、人間たちの中で生きていた頃よりも、はるかに多くを見ている。

もしあの頃、私が今彼らの心を見ているほど深く、自分自身の心を見つめていたなら、私は自分の心の中に、同胞たちの心が映し出されているのを見ていただろう。

なぜなら、私たちは、一匹の昆虫が別の昆虫と違って
いる程度にしか互いに違ってないからである。

昆虫同士にも違いはある。

おお、人々よ！

私はあなた方の心を見つめる。

そして、そこに見えるものはこれである。

理想と偽善。

利己心と利他心。

飢えと満腹。

では私は、助言を与えるにあたり、あなた方の理想
へ訴えるべきなのか。

あなた方の利己心へ訴えるべきなのか。

それとも、あなた方の飢えへ訴えるべきなのか。

その反対側にある三つ——偽善、利他心、満腹——は、私があなた方に進んでほしい方向へ、あなた方を行動へ駆り立てることは決してないだろう。

LETTER VII

第七の手紙

THE BUILDERS

建設者たち

1917 年 3 月 22 日

私は、あなた方がどのように均衡を回復できるかについて助言を与えると約束した。

その余剰の黄金の多くを、荒廃したヨーロッパの再建に使いなさい。

信用を与え、食糧を与えなさい。

畑で働ける者たちは、ヨーロッパを養うための食糧を育てなさい。

建設できる者たちは、必要とされる場所で、自分の

手の労働を提供しなさい。

ここで不満を抱いている者たちは、自分を生んだヨーロッパへ戻りなさい。

そうすることで、あなた方は自分自身へ新しい視点を与えることになる。

そして、自分自身へ新しい関心を与えることになる。

新しい関心とは、新しい生命の延長である。

犠牲を払いなさい。

そういう時、私は二つの目的を見ている。

世界への影響と、あなた方自身への影響である。

理想のために働くことは、時として、いわゆる現実

のために働くことよりも实际的である。

私がヨーロッパを再建しなさいと語る時、あなた方はそれを、自分の視点に応じて、理想的助言としても、实际的助言としても受け取ることができる。

それが理想的であるのは、ヨーロッパが再建を必要としているからである。

それが实际的であるのは、今、そしてしばらくの間、アメリカには、自分自身の外側に何か関心を向ける必要があるからである。

私たちは、あまりにも自己中心的になっている人々に対して、同じ助言を与える。

不満と不安があまりにも多いため、多くの人々の注意を引きつけ、それを維持し、自分自身を忘れさ

せることのできるものなら何であれ、人々を「人類全体の幸福」のために働く民族の霊的指導存在によって用いられる状態へ導き得るのである。

ヨーロッパへ金を貸しなさい。

そして高利貸しのような利息を要求してはならない。

そう、利息を取ること自体はよい。

金には稼ぐ力があり、労働者——たとえその労働者が“黄金”であっても——その報酬に値するからである。

しかし、低利で寛大に貸し付けることによって、ヨーロッパの人々に課せられている恐ろしい税負担を軽減する助けをしなさい。

その税負担こそが、不満と失望を生み出している
のである。

あなた方の多くはヨーロッパへ行きなさい。

そうすることで、戦争が一つの国へ何をするのか、
また、もし利己的になって、外部の者たちに、あなた
方が巧みに築き上げたものを力によって奪いたい
と思わせるような状態へ自分たちをさらせば、それ
があなた方の国へ何をし得るのかを理解できるか
らである。

行きなさい。

そして、長い戦争の中でヨーロッパの人々を支え
てきた自己犠牲と国家への献身の精神を、面と向
かってのみ感じ取れる仕方で、見て、感じなさい。

彼らは自分たちの魂を見いだした。

しかし、あなた方はまだ自分たちの魂を見いだしていない。

この国には、ここにいる必要性よりも、ヨーロッパで必要とされるほうが大きい技術者たちがいる。

科学のあらゆる分野にも、こちらより向こうで必要とされている専門家たちがいる。

私たちには十分な専門家がいる。
数人くらい送り出す余裕はある。

船を造りなさい。
もっと多くの船を造りなさい。

人々を働かせ続けなさい。

彼らへ目標を与えなさい。

考え込ませてはならない。

暇な頭は悪魔の作業場である。

もし十分な仕事がないなら、仕事を作り出さなさい。

やるべきことは十分に存在している。

船を造りなさい。

さて、鉄道やその他公共事業の運営について述べよう。

政府管理の時代は、もし実行されていたなら国家の車輪を止めてしまったであろうストライキの脅威

が現れた時点ですでに予告されていた。

その車輪が止まることで国家の生命や人々の移動を脅かし得るすべての公共事業は、政府によって運営されるべきである。

これは社会主義でも、その他の何らかの「主義」でもない。

それらに株を持っているあなた方よ、恐れてはならない。

あなた方を満足させる方法は見つけられる。

全体の利益について考えなさい。

部分であるあなた方は、全体の幸福なしには繁栄できないのだから。

これは空虚な美辞麗句ではない。

これは一種の「人類生物学」である。

私は上方からあなた方を、一つの巨大な存在として見ている。

そして私は、点在する少数の個人としてではなく、「人類的統一体」としての存在へ処方を与えているのである。

この「人類存在」の身体を構成する細胞たちは、すべて共に働かなければならない。

人類として、一つの意識単位を持ちなさい。

人類単位の意識へ、自らを委ねなさい。

好きなだけ個性的であってよい。
しかし、「個性的な部分」でありなさい。

他の個人たちと均衡の中へ入りなさい。
陽と陰のように。

ヨーロッパ再建を、一つの目標としなさい。

多くの不満を抱えた労働者たちが、ヨーロッパで働けるようにしなさい。

あなた方は、軍務から解放されたヨーロッパの軍隊が十分な労働者を供給するだろうと言うかもしれない。

しかし、労働者は多すぎることはない。

ここには二重の目的がある。

仕事を成し遂げること、そして労働者への心理的効果である。

私が持っている意識状態を、注入によってあなた方の心へ入れられたらよいのと思う。

分離とは死であり、統一とは生命であることを、あなた方へ理解させられたらよいのと思う。

私は鉄道の政府管理について語った。
しかしそれは始まりに過ぎない。

食糧も政府によって管理されるべきである。

徐々に始めなさい。
一つずつ進めていきなさい。

世界の運命は、その方向へ進むことになっている。
あなた方は、その戦車の車輪を止めることはできない。

「生き残りたければ奉仕せよ」というのは、良い標語になるだろう。

奉仕しなければ、あなた方は生き残れない——あなた方全員が。

私は、人類存在の一部である細胞という比喩が気に入っている。

それが、私があなた方を見る方法なのだ。

神経病について少しだけ語ろう。

そう、それは今まで私が話してきたことと関係して

いる。

長く不自然な戦争の緊張の後、ついに緩和の時が来た時、人々の精神は、正常状態へ戻ろうとする中で、変化した状況へすぐには適応できないことがある。

長い間、人々の脳は、共同行動というコーヒーによって刺激され続けてきた。

そのため、自分自身へ戻された時、彼らは過度に弛緩してしまうかもしれない。

あるいは逆に、不自然な興奮が、彼らをあらゆる種類の過剰行動へ駆り立てるかもしれない。

あなた方は、休むことのできない躁病患者を見たことがあるだろうか。

彼らは休む能力を失っている。

歩き回り、足を打ち鳴らし、拳を握り締める。

この戦争の後、多くの男女がそのようになるかもしれない。

愛情の興奮が過剰になることは確実であり、その症状に対しては、仕事が良い万能薬となる。

さらにまた、長年の戦争——朝、生きていても夜には生きているか分からなかった年月——の後では、人々は恐怖の習慣を保持してしまうかもしれない。

彼らは休むことを恐れ、くつろぐことを恐れるようになるかもしれない。

そのため、彼らは、慣れ親しんできた刺激の代用品として、どんな興奮でも歓迎してしまうかもしれない。

それが、私がアメリカ人たちをヨーロッパの労働者たちと共に働かせたいと考える、もう一つの理由である。

アメリカの労働者が鈍感だという意味ではない。まったく逆である。

しかし彼は、自分の仕事を失い、その結果として飢えること以外には、ほとんど何も恐れたことがない精神を持っている。

そのため、彼は周囲の人々へ、自信と希望の影響を与えることになるだろう。

アメリカ人は、自分が先導していると感じることを好む。

そして、仲間たちを希望へ導くこと以上に、その性向を満たせる方法があるだろうか。

あなた方には想像もできない——いや、想像することは不可能だ——この戦争の後、しばらくの間続くことになる大きな落ち込みについて。

それは、緊張の緩みであり、力が抜けることなのだ。

戦争の後には常に、引き潮の後に大きな活動が訪れる。

しかし、私たちが考慮しなければならないのは、その引き潮なのである。

アメリカにいるあなた方も、それを感じるようになる。

あなた方は、黄金がこの岸边へ流れ込んで来るのを見ることに慣れてしまった。

その流れが弱まった時、あなた方は、その減少を恐れる傾向と戦わなければならなくなる。

恐慌とは、集団によって増幅された個人的恐怖のようものである。

世界は互いに接近しつつあり、一部分に影響するものは全体へ影響する。

戦争の後には、世界中で、人々の霊的感覚の開放も起こるだろう。

これは、それ自体は良いことであるが、新たな危険にもなり得る。

真の預言者も偽りの預言者も、あらゆる場所に現れるだろう。

そして魂や肉体の病に対する、多くの治療法を掲げることになる。

もし私がもう一つ助言を与えることが許されるなら、それは、霊的覚醒を経験した者たちは、その事実を公表する前によく考えるべきだ、ということである。

それは、今まさに現れ始めている新しい感覚なのだ。

しかし、進化の初期段階で目が開いた時、それが祝福と同じくらい多くの危険を見せたであろうように、この新しい感覚もまた危険を見せることになる。

新しい感覚を閉ざそうとしてはならない。
しかし、それに飲み込まれてもならない。

それが、実際にはほとんど一般的なものになることを忘れてはならない。
そして、あらゆる新しい感覚がそうであるように、それは長い間、不完全なままだろう。

それは真実だけでなく、偽りのものも見せる。

もし人間が初めて目を開き、無害な木を見たなら、それを怪物と勘違いするかもしれない。

あらゆることにおいて節度を。

あらゆることにおいて中庸を。

たとえ称賛に値する行動への欲求においてさえも。

量り、測りなさい。

何事も受け入れる前に検証しなさい——実践による証明を待てないなら、理性と直感によって検証しなさい。

私の言葉も、もっとも荒唐無稽な新しい予言者の言葉も、同じように量り、測りなさい。

ヒステリーを助長してはならない。

ヒステリーの波が世界を覆う可能性が高いからで

ある。

革命が革命を呼ぶ中で、世界の驚き怯えた住人たちは、「宇宙には何一つ安定したものはない」「すべては破滅へ向かっている」と思い込むかもしれない。

そして、自分たちを普遍的混沌のように見えるものから救えないのなら、せめて過ぎ去っていく瞬間から、可能な限りの快楽的興奮を得よう、と考えるかもしれない。

節度を！

節度を！

私は、明日の不確実さゆえに、子供を産むことを恐れる女性たちを見る。

私は、家庭生活の不確実さゆえに、結婚を恐れる
男性たちを見る。

私は、収穫の不確実さゆえに、種をまくことをため
らう農民たちを見る。

もう一度言おう。
恐れてはならない。

もし種をまけば、あなたは刈り取ることになる。

もし結婚すれば、あなたは家庭を築くことになる。

もし子供を持てば、人類は彼らを守るだろう——そ
して、あなた自身もまた、その人類の一部なのであ
る。

節度を！

そして恐れなきことを！

LETTER VIII

第八の手紙

THE WORLD OF MIND

精神の世界

1917 年 3 月 24 日

私は、健全で正気 of 精神を持つ人々が、もっとテレパシー通信の実験を行ってくれたらと思う。

現象を用いた、まとまりのない半ば冗談のような遊びが大量に存在していることは知っている。

しかし、科学的に正確な観察と、科学的に精密な記録によって、これらの主題についての健全な文献が増えるだけでなく、超常的事実を注意深く観察し、正確に報告する習慣も、実験者たちの中に育っ

ていくだろう。

私のために書いているあなたよ、実験を続け、それを記録し続けなさい。

あなたはほとんど慎重すぎるほどだが、大半の人々は慎重さが足りない。

共に作業する者たちの間で必要となる、受動性と能動性の条件を説明しなさい。

あなた一人でいる時に最良の結果が得られることも多いが、それでも、一人の証言より、同じ現象を目撃し参加した複数人の証言のほうが、より説得力を持つ。

しかし、あなたが、不誠実で、単なる好奇心だけであなたと作業したがる人々の霊的状态を引き受け

ることをためらっているのは正しい。

大半の人々にとって最大の困難は、一時的に十分な受動状態になれないことである。

実験が終わった後には、彼らは再び同じだけ能動的になることができるし、またそうあるべきである。

彼らは、一方の極からもう一方の極へ移行することができる。

そして、身体的健康と均衡を保ちたいなら、そうしなければならない。

しかし覚えておきなさい。

こちら側から来る影響も、この世界の影響と同じように、善いものも悪いものも存在する。

もし、何らかの「存在」が敵対的であると感じたなら、即座にそれを追い払い、自分を能動的状態へ戻しなさい。

望ましくない影響に接触した後には、数時間の間、自分を受動状態にしてはならない。

散歩へ出かけるか、難しい仕事へ取り組むか、あるいは意味を理解するために精神活動を必要とする本を読みなさい。

あなた方は、霊的な海の中に生きているだけでなく、精神の海の中にも生きている。

それらは互いに浸透し合い、さらに物質とも浸透し合っている。

しかし、それらを通して、またそれらと共に働く際に

は、可能な限り区別して扱いなさい。

私はますます精神世界で働くようになり、アストラル界ではますます働かなくなっている。

しかし、私の読者の大多数は、この言葉の正確な意味を理解しないだろう。

アストラルと精神世界の違いは、アストラルと物質世界の違いよりも、さらに大きいのである。

アストラルを軽蔑してはならない。
その力学は巨大な重要性を持っている。

しかし、ますます純粋な精神性を育てなさい。
なぜなら、あなた方全員において、アストラルは精神性以上に発達しているからである。

私は以前の著作で、アストラルの危険について何かを語った。

今度は、精神世界における、より明白な危険について語りたい。

精神の中で創造できることを学んだ者たちは、責任感を発達させる必要がある。

彼らは、自分の力を示すことにおいて、あまりにも無謀なのである。

存在の層を上へ進むほど、あなた方はますます微細な領域へ入っていくことを忘れてはならない。

そして力は、その微細さの度合いに応じて増していく。

あなた方が自然に想像するように、その逆ではない。

精神世界における最大の誘惑の一つは、虚偽を創造することである。

真実でないことを語ることによって、あなたは精神の領域へ、ある程度の永続性を持つ映像を投射する。

それは他者を欺くかもしれない。

しかし、やがては、その創造者であるあなた自身を欺くことになる。

偽りを語る者は、真理を知覚できない。

精神世界に虚偽の映像を創り出す者たちは、その映像そのものによって欺かれることになる。

彼らは、自らが作り出した原因の結果を刈り取る
のである。

あなた方は、「友人」たちによっていつも欺かれて
いる人々を知らなかっただろうか。

そうした人々は、たいてい、自分自身が欺瞞的な
映像を残してきた者たちである。

虚偽と真実を区別できない人々が存在する。
彼らは欺き、そして欺かれる。

欺く者たちは、自分がどれほど知性的だと思われ
ていようとも、常に欺かれるのである。

そして今、私が透視やテレパシーの実験を勧めて
いる人々へ、こう言いたい。

もし彼らが虚偽の種をまいてきたなら、彼らは欺瞞的幻影の収穫を刈り取ることになるだろう。

自分を誠実だと思っているあなた方よ、その方法で自分自身を試してみなさい。

あなた方は、自分自身のカルマについて、価値ある何かを学ぶかもしれない。

(そう、私は、自分の意味を表現するのに適しているなら、神智学やインドの用語を使うつもりである。

東洋哲学を西洋風の言葉へ書き換えている者たちは、無知な人々に対してしか独創的には見えない。)

新しい人類がもっとも必要としているものは、何よりも真理である。

現代科学は、恐れずに真理へ向き合うための準備
を世界へ施している。

自然界のある事実を観察し記録するために顕微鏡
へ向かって働いている人間は、敬虔ぶった顔で他
人へ「あれをしてはならない、これをしてはならな
い」と語る人間よりも、神への奉仕者である。

少なくとも彼の仕事は、その結果において積極的
だからである。

「汝、してはならない」が多すぎる。

「私はする」が少なすぎる。

新しい人類は、広い寛容さを発達させるだろう。

それは、望ましくないものを攻撃するよりも、むしろ

無視することによって抑えていく。

なぜなら、何かを攻撃することで、私たちはそれへ力を与えてしまうからである。

ますます精神世界で働きなさい。

その結果は、物質世界において巨大なものとなるだろう。

LETTER IX

第九の手紙

AMERICA'S GOOD FRIDAY

アメリカの聖金曜日

1917 年 4 月 6 日

真夜中を過ぎた。

今日は聖金曜日である。

世界と、すべての時代に関わる重大な決断が、
人々の魂の中に重くのしかかっている。

この日が象徴している、遠い昔のその日に、一人の
男——(彼は同時に神でもあった)——が、愛と人
類愛という理念のために、ただ一人立ち上がった。

そしてついに、これらすべての年月を経て、彼がそのために死んだものが、実現されようとしている。

しかし、あの何世紀も前の金曜日には、磔刑があった。

私はあなたを遠い岸边から連れて来た。
それは、人々の魂の中で起こっている偉大な戦いを、あなたに目撃させるためである。

あなたは中心地へ到着したのだ。*

*私は、カリフォルニアでの長い滞在の後、数時間前にニューヨークへ到着したばかりだった。

今日、キリスト教世界の何千もの教会で、人の中の神が生きるために死んだ神人へ祈りが捧げられるだろう。

今日、何百万もの心の中に十字架が立てられるだろう。

この「日々の中の日」の、真夜中を少し過ぎたこの時刻、ここは実に静かである。

キリスト教世界は立ち上がり、ある出来事を目撃するために、ゴルゴタへ向かって進んでいる……。

祈りなさい！

祈りとは、魂が「一なるもの」との一体性を肯定することである。

戦争とは、魂が多くものから分離していることを肯定することである。

あなたの敵を愛しなさい。

それが、彼らを征服できる唯一の方法なのである。

LETTER X

第十の手紙

THE CRUCIBLE

るつぼ

1917 年 4 月 19 日

人類が今通り抜けている、このイニシエーションについて少し語ろう。

常に、試練は到達に先立つ。

これらの戦争が終わる時、そこには新しい世界が存在しているだろう。

なぜなら、人々の魂は火と血によって洗礼を受けているからである。

アメリカもまた、その中で自らの役割を果たさねばならない。

彼女にもまた、試練と到達が訪れねばならない。

見守り、そして祈りなさい。

いつの日か、私はあなたを再び送り出すだろう。

旧世界の魂と交わるために——いつの日か、私たちはあなたを再び送り出す。

そこであなたが見いだすのは、別のヨーロッパである。

火によって試されたヨーロッパである。

その一部は上質な鋼となり、一部は炉の中の燃えかすとなるだろう。

なぜなら、火は金属を試し、金属を鉱滓から分離するからである。

戦争以前から今日に至るまで、地上の戦いは、あなた自身の魂の中でも演じられてきた。
血と火、苦痛と苦難が。

あなたもまた、火の炉を通り抜けてきたのである。

ずっと以前、あなたが自分の魂を世界の魂と同一視した時、あなたは世界の試練——イニシエーションの試練——を自ら引き受けた。

あなたはまた、自らの古いカルマの重荷——長い時代を通して自ら作り出してきた原因の結果——を、自分自身へ呼び寄せたのである。

今、あなたがしばらく休息状態にあるということは、ただ、あなたがその重荷の一部から自分を解放したという意味に過ぎない。

もし今それを行わなかったなら、未来において行わねばならなかっただろう。

目標へ近づけてくれるあらゆる試練を喜びなさい。そして私は、これをすべての人々へ向けて語っている。

もし今、私がアメリカだけではなく世界について語るなら、それは部分を全体と同一視するためである。

もし私があなた個人について語るなら、それはあなたを全体と同一視するためである。

あなたが向かうことになるあのヨーロッパでは、二種類の人々を見いだすだろう。

上質な鋼となった者たちと、廃棄物となった者たち

である。

あなたは、一方を他方から見分けるだろう。

彼らはあなたを歓迎するだろう。

なぜなら、あなたも彼らと共に火を通り抜けてきたからである。

彼らは、あなたの国をも歓迎するだろう。

なぜなら、その国も今や火へ顔を向けているからである。

陰鬱な予言によって落胆してはならない。

人はパンのみによって生きるのではない。

もし食べる物が減れば、あなた方の身体はより洗練されるだろう。

もしやるべきことが増えれば、あなた方の精神と思考は拡大するだろう。

あなた方のうち、自分の能力を完全に使って働いている者はほとんどいない。

「人間」という力の単位は、多大なエネルギーを生み出すことができる。

必要や意志の呼びかけによって、自らの深みからそれを引き上げながら。

今はもっと懸命に働きなさい。

かつて私は、もっと休みなさいとあなたへ言った。

しかし今、労働者たちは葡萄園へ呼ばれている。

休息の時は再び訪れる。

一日の終わりが近づく時に。

我が国よ、この戦争へ入るにあたり、あらゆる怨恨を捨て去りなさい。

そして、怨恨の存在しない「正義」のために戦いなさい。

憎んではない。

憎しみの時代は過ぎ去ったのである。

(私はこう言う。憎しみと、その母である恐怖が、あなた方の魂へ挑みかかって来ることを知りながら。)

私は憎まない。

そして私は恐れない。

そして私は、一日の終わりが近づくまで、あなた方と共に留まるだろう。

今では、あなたは、私に再び語らせたことを後悔しているだろうか。

恐怖があなたの家へ来る時、私はあなたへ勇気について語るだろう。

憎しみがあなたを脅かす時、私はそれを愛へ変えるだろう。

私は、卑金属を黄金へ変えることのできる「賢者の石」を見つけたのである。

憎しみは、この鷲が叫ぶ土地において、愛へ変えられるだろう。

鷺の叫びを聞きなさい。

それは自由な鳥であり、高く飛ぶ。

そのメッセージは、これまで数えられてきた年月の中では、ただほのめかされていただけである。

鷺は自由を教えるだろう。

そして人々は耳を傾ける——海の向こうで。

アメリカは、まさに民族のるつぼである。

私は、これ以上よい比喩を見つけることができない。

今、アメリカへ忠誠を尽くしているドイツ系アメリカ人——勇敢な表情の背後に、自らの心の悲劇を隠している彼——もまた、炉を通り抜け、上質な鋼となるかもしれない。

あなたが、彼らが苦しんでいることを理解しているのを、私は嬉しく思う。

忠実な者たちを、他のすべての忠実なアメリカ人たちと共に、あなたの心の中へ抱きなさい。

そうすることで、あなたは「融合」の過程を助けることになる。

彼らのうちの何人かにとっては、この悲劇がイニシエーションへの扉を開くことになるだろう。

誓約への忠誠は、戦場の火よりも、さらに高貴な試練なのである。

忠実な者たちは、賤民として扱われてはならない。

不忠実な者たちについて、私は何も語らない。
彼らについては、「法」に委ねておく。

イニシエーションの過程！
それは今、地球をその掌中に握っている。

そして、あなたが愛している人々の中にも、その掌
中に握られている者たちがいる。

彼らは苦しんでいる——あなたが苦しんできたよ
うに。

しかし、彼らは平安を見いだすだろう。

LETTER XI

第十一の手紙

CLEAN YOUR HOUSE

あなたの家を清めよ

1917 年 5 月 4 日

あなたは、人類が今、秤にかけてられていることを知っているだろうか。

不足ありと判定されないよう、働き、そして祈りなさい。

あなた方にとって「他界」であるあの世界の、澄み切った光の中に住む私たちは、壁に書かれた文字を見ることができる。

世界は、あまりにも不誠実であった。

もし世界が誠実だったなら、この戦争など起こり得ただろうか。

これから来る世界では、国家は国家を疑わず、人は人を疑わないだろう。

しかし今は、不信が人類の装備の必要な一部となっている。

あなたは信頼してよい——だが、信頼しすぎてはならない。

あなたは隣人を愛してよい——だが、愛しすぎてはならない。

あなたは、自分がしてほしいように兄弟へ行っても

い——だが、常にそうしてはならない。

アメリカは理想という土台の上に築かれた。

しかし、あなた方の煉瓦の良い粘土には、個人的利益追求という泥が、あまりにも多く混ざっている。

あなた方は、自らの血によって、一つの疫病の汚点——奴隷制度——を洗い流した。

しかし、あなた方には、もう一つ洗い流さねばならない疫病の汚点がある。

あなた方は、それを善意という自由な水によって洗い流すのか。

それとも再び、自らの血によって洗い流すのか。

私は見守っている。

アメリカが戦争へ参入したからといって、世界の苦難は終わったなどと言ってはならない。

世界の苦難は終わっていない。

戦争が終わる時——より大きな戦争が——あなたの家を清めよ、おおアメリカよ！

不誠実に対する報酬が、これほど高い文明国は他に存在しない。

あなたは一ポンドのバターを買って、本当に十六オンス全部入っていると確信できるだろうか。

あなたは一ポンドの肉を買って、その秤が正確だと信じられるだろうか。

新しい人類が生まれつつある。

まずはその子供たちから始めなさい。

そして、地理を教える前に、誠実さを教えなさい——
——親に対する誠実さ、互いへの誠実さ、自分自身
への誠実さを。

「若木が曲げられるように、木は傾いて育つ。」

私が小さな少年だった頃、ジョージ・ワシントンは嘘
をつけなかったのだと教えられた。

私はジョージ・ワシントンに対する理想像を持っ
ていた。

私は彼を見習いたいと思った。

だから私は、大人になった時、真理を求めた。

私はそれを地表の上にも探したし、深い井戸の中にも探した。

かつて私は、自分自身の中に真理を見つけようとして、荒野で何年も過ごした。

そして私は、それを見つけるまで荒野に留まり続けた。

もし見つけられなかったなら、私はそこへ自分の骨を残していただろう。

あなた方には、新しい書き取り帳の格言集が必要である。

もし、朝、学校で「正直は最善の策である」と書き取

っていた少年が、午後には、自分の父親が気難しい馬を良い馬車馬として売りつけようとしているのを見たなら、その少年は教師が自分をからかっているのではないかと思うだろう。

子供たちの幻滅は悲劇であり、来たるべき国家に対する脅威を含んでいる。

私は、アデプトの教師の目に非難を見るよりも、子供の目に非難を見るほうを、はるかに恐れる。

もし私が自分の教師を失望させても、私は彼をそれほど深く傷つけはしない。

しかし、もし私が自分の子供を失望させれば、私はその子を取り返しのつかないほど傷つけるのである。

あなた方は、アメリカの生活が再編成されようとし

ているという事実に向き合わねばならない。

あなた方は、なぜ最近私が書かなかったのか不思議に思っていた。

私は忙しかったのである。
アメリカを研究していたのだ。

私は、あなた方へ語れる多くのものを見た。
そして、まだ語れない多くのものも見た。

なぜなら、私はあなた方に静かでいてほしいからである。

もしあなたが、私が知っているほど多くを知ったなら、静かではいられないだろう。

「必要は法を知らない」と言われてきた。

戦争で暴利をむさぼる者たちよ、それを忘れてはならない。

世界の必需品を独占しようとする者たちよ、追い詰められた動物は危険だということを覚えておきなさい。

そして、追い詰められた“必要”には、蹄と角がある。

医師たちの間ですら名前を持たない病気がある——巨大な所有物の病である。

その症状は、さらに多くを所有したいという貪欲な欲望と、所有物を失うことへの恐怖症である。

それは、神経痛と消化不良を合わせたよりもひどく、犠牲者の休息を妨げる。

私は、アメリカで、一億以上の人々が平和と豊かさの中で生きる姿を見たいと切望している。

狂信者たちは、大財産の没収について騒ぎ立てる。

私は、あなた方が自分の財産をどうするかについては、それほど気にしていない。

しかし、私は、あなた方が土地や食糧をどう扱うかについては大いに気にしている。

そして、それ以上に、あなた方が男たちや女たちや小さな子供たちをどう扱うかについて気にしている。

どうか恐慌状態に陥らないでほしい。

恐慌は、流砂よりも危険である。

一度入り込めば抜け出しにくい。

落ち着きを保ちなさい。

この国は、理性を失わない限り、危険には陥らない。

LETTER XII

第十二の手紙

LEVEL HEADS

冷静な頭脳

1917 年 5 月 15 日

興奮してはならない、アメリカ人たちよ。

もし冷静さを保てば、あなた方はこのすべてを無事に切り抜けるだろう。

もし冷静さを失えば、それ以外の多くのものも失うかもしれない——百年かかっても取り戻せないほど多くのものを。

私は興奮していない。

私は冷静さを失っていない。

(そう、私は今でも頭を持っているし、手も足も持っている。

もし私がこちらの世界で、手足なしに生きようとしたなら、その慣れない状態への適応が、反動的に私の頭へ影響を及ぼすだろう。

私は、自分の身体の部分を取り除く実験をしているわけではない。)

あなた方は今、ロシアという国が、「頭なしで生きる」という実験をしているのを見ている。

どんな国家も、頭なしには国家として存在し続けることはできない。

しかも、その頭は冷静でなければならない。

どれほど極端に共和主義的であれ、民主主義的であれ、社会主義的であれ、あるいはその他どんな種類の国家であれ、頭を必要とする。

完全に無政府状態の人々の集まりは、国家とは呼べない。

その土地は、単に個々の単位によって人口を満たされた地理的区域に過ぎなくなる。

そして、その単位たちは他の単位と関係を持たないため、ゼロと同じようなものになってしまう。

私が最近ほとんど書かないからといって、焦れてはならない。

私はかなり忙しいのである。

本当に語らねばならないことがある時には、私は必ず来る。

変化がアメリカへ訪れつつある。

いや、かなりの変化は、すでに起きているではないか？ *

* 私の記憶が正しければ、ちょうどこの頃、多くの富豪たちが、年俸 1 ドルで政府のために働き始めた。

この国は偉大である。

この国は強い。

この国は適応力を持っている。

この国は変化へ適応することができる。

この国の人々は、長い間奴隷ではなかった。

ロシアの人々は、あまりにも多くの種類の奴隷状態を経験してきたため、自由への反応が、自由な世界にとって予想外のものとなっている。

待ちなさい！

この問題について、冷静さを失ってはならない。

私が再びあなたと共に書いていることを、少数の人々が知っていることについて、私は別に反対しない。

彼らは、私へ影響を与えることはできない。

ただ、その関心によって私を励ますことを除いては。

LETTER XIII

第十三の手紙

TIMES AND BRICK WALLS

時代と煉瓦の壁

1917 年 5 月 16 日

あなたは、多くの場所から聞こえてくる、世界的災害や大変動、人類の半数が減びるといった陰鬱な予言が、世界を落胆させてしまうのではないかと恐れている。

しかし覚えておきなさい。

希望は、人間の胸の中に永遠に湧き続けるのである。

そして、人々の精神が大変動という考えに慣れて

いれば、より小さな変化に対しては、もっと容易に
適応できるようになる。

旧約聖書を読みなさい。

もっとも陰鬱な予言でさえ、その通りには実現しな
かった。

しかし、変化そのものは訪れたのである。

アメリカの「独立系の牧師」たちの中には、エレミヤ
よりもさらに激しい者たちがいる。

しかし彼らも、間接的には役立っている。

人々の精神を「変化」という考えへ慣れさせている
からである。

もし恐慌が来るなら——そして、それは来るかもし
れない——恐慌に飲み込まれてはならない。

もし暴力が来るなら——そして、それは来るかもしれない——暴力的になってはならない。

もし落胆が来るなら——そして、それは必ず来る——落胆してはならない。

あなたの頭脳が熱くなりすぎた時には、木々をじっと見つめなさい。

それらはあなたを静めてくれるだろう。

もし近所に木がないなら——そうだな、興奮した瞬間には煉瓦の壁を見つめなさい。

煉瓦の壁は、人を落ち着かせる光景である。
外側から動かされない限り、それは静かに立ち続けている。

LETTER XIV

第十四の手紙

INVISIBLE ARMIES

見えざる軍隊

1917 年 5 月 23 日

こちらの世界で完全に目覚め、自我を持つようになった兵士たちの多くは、地上で自らの命を捧げた目的を実現しようと努力している。

そのため、この戦争の双方の側に属していた兵士たちが、今ではこのヴェールのこちら側でも活動しているのである。

変化の直後には、彼らの多くは互いに戦い合う。
しかし、やがて彼らは、肉体を持つ仲間たちへ注意

を向けるほうが、より効果的な仕事になることを学ぶ。

彼らは慰め、鼓舞し、教えることができるのである。

私たちは、こちらで軍隊を編成している。

志願者不足など存在しない。

アメリカは救われなければならない。

そして、アメリカがどれほど多くのものから救われなければならないのかを、あなた方のほとんどは知らない。

しかし私たちは知っている——過去二年九か月の間、世界を見守ってきた私たちは。

死ぬことは、それほど恐ろしいことではない。

実際には、生まれることのほうが、はるかに恐ろしいのである。

こちらで私たちが募集している軍隊は、あらゆる年齢の人々によって構成されている——もちろん、この人生における年齢のことである。

そう、私たちの軍隊には女性たちもいる。

そこには南北戦争の古参兵もいれば、米西戦争の古参兵もいる。

この軍隊の連隊や師団の上には、地上の軍隊と同じように指揮官たちが存在している。

そうでなければ、その活動は目的の統一性を欠いてしまうからである。

私たちの軍隊は、主として志願兵によって成り立っ

ている。

もっとも、徴兵制度がこちらに存在しないわけではない。

あなたは、私の意味が分からず不思議に思っているのだろう。

私たちが、無益な仕事から魂を呼び出し、有益な労働を与えることができるとは思わないのか。

私たちは、それを毎日のように行っているのである。

私たちは、古くからのアメリカ人たち——今なお地球の近くに大量に留まっている、赤い肌の狩人や戦士たち——からも、多くを徴募している。

彼らにしかできない仕事が存在するのである。

仕事には多くの種類があり、働き手にも大きな多様性がある。

私は海岸から海岸へと行き来している。

太平洋沿岸で何が行われているのかも知っているし、大西洋岸諸州やメキシコ湾岸、さらに中西部やロッキー山脈地帯も、私には馴染み深い土地である。

私は、この活動の時代の中で、自らの若さを取り戻している。

私は祖国のために働いている。

そして、私自身もまた訓練中なのだ。

なぜあなたは微笑むのか？

精神と意志の訓練というものが存在する。

それは肉体の訓練よりも、さらに効果的であり、さらに速い。

さらにまた、アストラル体も、高度な効率性と柔軟性へ向けて訓練することができる。

もちろん、私はそんなことを改めてあなたへ説明する必要はないだろう。

そして私は、他の者たちも訓練している。

私たちのような古参たちは、こうした時代には非常に役立つことができる。

私は今、自分があの時期にこちらへ来たことを嬉しく思っている。

世界がまだ平和で、多くのことに時間を割けた時

代に、自分の修練期間を通り抜けたことを。

私は素晴らしい休暇を過ごした。

私は見えない世界の荒野を狩り歩き、宇宙の水域で釣りをした。

しかし今、私は再び自分の仕事へ戻っている。

LETTER XV

第十五の手紙

THE WEAKEST LINK

最も弱い環

1917 年 6 月 2 日

叡智の師たちの記録保管庫には、この国の過去と未来に関するある種の資料が存在している。

もしそれが、この国家的危機の時代に新聞へ掲載されるなら、非常に興味深い読み物となるだろう。

アメリカは、自らが民主主義という使命を持っていることには気づいている。

しかし、それと同じほど強力な、もう一つの使命に

については気づいていない。

それは、「世界を霊的文化にとって安全な場所にする」という使命である。

私は、一般に使われている意味での宗教を言っているのではない。

私が言うのは、「愛の精神の文化」のことである。

それは、ナザレのイエスの教えから世界が不完全に理解してきたような愛の理念であり、人々はそれを理解しても、利己心という物質的労働によって冷やされた手には、その理念が熱すぎたため、再び落としてしまったのである。

アメリカは、物質世界を超えた領域において、自らのために一つの負債——義務——を積み上げてきた。

それは決して「天に積まれた宝」ではない。
しかし、その負債が支払われる時、それは真の霊
的宝となるかもしれない。

私は、かつてこの土地を自由な所有者として占め
ていた魂たちの軍勢について語っている。
彼らは、ティピーや狩猟地の代わりに成長した拡大
する文明によって、追放され、継承権を奪われたの
である。

それらの魂たちの多くは、再び戻ることを望んでい
る。

すでに戻って来ている者も多い。

そして、もし彼らが、過去に慣れ親しんでいた自由
な生活を再び送れるような道が開かれなければ、

彼らは破壊的な力となる傾向を持つだろう。

彼らは今や、白い身体をまとい、あなた方と共に市民権を主張しているため、かつてのように簡単には排除できない。

彼らは、この広大な土地の海岸から海岸まで散らばっている。

あなた方は、彼らをその鷺のような目、高い頬骨、自由な歩き方、そして自由への愛によって見分けることができる。

彼らは工場や事務所の中で拘束されることを嫌う。

彼らは、どこか違った雰囲気を持つ事務員であり、夢を抱いた労働者たちである。

彼らの多くは、ヨーロッパ移民の子供たちとして、この陽光あふれる世界へ入って来ている。

なぜなら、彼らは、アングロサクソンの血よりも、ある種の他民族の血のほうへ、より容易に入ることができるからである——アングロサクソンがどれほど自由を愛していようとも。

いつの日か、この現在は外国の血を持つ原初的アメリカ人たちが、本能的に、自分たちを縛ってきた抑圧的影響へ反抗する時が来るかもしれない。

その時、彼らは、かつての自然の生活を再び生きようと求めるだろう。

たとえば、それを「天国が奪い取られるようにして得られる」と言われる方法で手に入れねばならなくとも。

これから、愛がこの土地で、かつてないほど必要とされる時代が来る。

その時には、「生き、そして他者を生かせ」が、単なる言葉ではなく法にならねばならない。

自然と共に自由を求める者たちには、その自由を与えることができる。

大都市の状況は厳しいものになるかもしれない。

私は、アメリカ人の心へ恐怖を植え付けようとしているのではない。

その反対に、私はあなた方を恐怖から守ろうとしているのである。

文明の車輪が、長い間止まり続けることはないだろう。

しかし、それは止まる可能性がある——宇宙の目が瞬きするほどの短い間だけでも。

アメリカは救われるだろう。

しかも、最大の危機の時に救われるだろう。

では、その最大の危機とは何なのか。

それは、あなた自身で考えなければならない。

惑星霊の目を通して見ることを学びなさい。

あなた方の視野は狭すぎる。

あなたにとっては、本が棚に並んでいる図書室こそ

が世界の中心かもしれない。

しかし、本当の中心は心の中にある。

そして心は至る所に存在している。

もしあなたが、自分自身についてではなく、人類について考えるなら、あなたの心は拡大されるだろう。

あなたは心の目で見えるようになる。

そして、心の目で見える者は、歴史家や知的予言者たちよりも賢いのである。

世界は、愛にとって安全な場所にされなければならない。

未来の仕組みの中では、すべての人間が守られな

ければならない。

すべての男たち、女たち、そして小さな子供たちが。

誰一人として無視しては安全ではない。

なぜなら、鎖は最も弱い環と同じ強さしか持たず、そのすべての環が強くされなければならないからである。

LETTER XVI

第十六の手紙

A COUNCIL IN THE FOREST

森の中の評議

ある夜、私が引き受けていた仕事の疲れから魂を休ませるために、ニューイングランド諸州の一つにある、地上の松林へ退いていた時のことである。

私は一人になろうとして、その場所を選んだ。
しかし、瞑想へ入り込むや否や、不思議な音が私の耳へ届いた。

それは地上の音とは違っていた。
より微細でありながら、より鋭く貫くような音だった。

そして私は、それが(もし歌と呼べるならば)太陽の光を越えた領域に住む、私の仲間たちによる歌なのだと理解した。

突然、彼らは勢いよく私のそばを飛び越え、空き地へ躍り出た。

そして円陣を作ると、そのまま待機した。

その時、私は地上のものではない光を見た。
焚き火の光である。

そして私は、自分が、古い宗教儀式を行おうとしているインディアンたちの一団に遭遇したのだと理解した。

私は彼らの儀式へ招かれてはいなかった。
しかし彼らもまた、私の瞑想へ立ち入るよう招かれてはいなかった。

そこで私はその場に留まり、彼らを見守った。

(そう、こちらの世界では秘密は少ない。
なぜなら、理解と寛容がより大きいからである。)

やがて私は、不思議な踊りを見つめることになった。

彼らは皆、円を描きながら燃え盛る火の周囲を回り続け、歌い、跳ねていた。

私は彼らの歌う言葉の意味は分からなかった。

しかし、彼らが作り出す思念の映像によって、その心を読むことはできた。

そして私は、彼らが——どのような月の暦によって

決められた日付かは分からなかったが——百年、あるいは二百年前に、自分たちが加わったある大規模なインディアン虐殺の日を祝っているのだと理解した。

そして、その踊りを動かしている衝動、その原動力は、自分たちを追い散らし、古い狩猟地から追放した白人への憎しみだった。

私は衝撃を受けた。

しかし同時に、アメリカ先住民たちの魂の内部を垣間見たことに魅了されてもいた。

私は彼らを見続けた。

私は魔術的儀式に詳しいわけではない。

しかし私はすぐに、この踊りには形と方法があり、さらに敵意ある目的が存在することを見抜いた。

彼らは、自らを興奮状態へ導き、思考を固定することで、このアメリカ合衆国中に散らばっている人々——知性は低いが霊的気質を持つ男たち——を刺激し、暴力と破壊行為へ駆り立てようとしていたのである。

「なるほど、彼らはこうやって行うのか！」
私はそう思った。

そこで私は、自分の思考が彼らに察知されないよう、その上へヴェールを下ろした。

そう、私はそれができる。
そして地上の多くの人間たちもまた、それができる。

私は松林の鋭く新鮮な香りを嗅ぐことができた。

そして、空き地を吹き抜ける風が高まっていくのを感じることもできた。

その風は、まるで彼らの呼びかけへ応え、自らの力を彼らへ提供しているかのようにだった。

あなた方は知っておかなければならない。

元素そのものには人格はない。

ただし、半ば人格を持つ存在たちが、その中へ住んでいる。

そして、元素やそれら半人格的存在たちは、一つまたは多くの人生の中でその特殊な力を得た存在なら、善にも悪にも利用し、導くことができるのである。

さらに私は遠方を見つめた。

すると、その吹き抜ける風が、これら長く死んだ男

たち——物質への執着によって、地上へ縛りつけるアストラル的重力から離れられずにいる魂たち——の思念と情念を運んでいるのが見えた。

私はなお遠方を見つめ続け、自分の意識を、私が学んだ方法で投射した。

すると私は、この復讐と脅迫の魔術的儀式の影響が、遠く散らばった人々の精神へ触れるのを見た。

私は、彼らの思考が突然、憎しみの色合いを帯びるのを見た。

自分たちの個人的欲望を実現できなかった文明に対する憎しみを。

そして私は知った。

その夜と翌日、さらにその後何日にもわたって断続的に、暴力行為が行われ、財産が破壊され、秩序

ある人々が脅かされることを。

私の心は悲しみに満たされた。

なぜなら、これまで私は、かつての入植者たちが作り出したカルマによって、この危機の時代に祖国がどれほど現実的な危険へさらされているかを理解していなかったからである。

もちろん、彼らは、自分たちや自分たちの新しい土地を、単純でありながら複雑でもあった先住民たちから解放することが正しいと信じていた。

その先住民たちの文明はヨーロッパ文明より古く、また、広大な大地の自由を知る者だけが土地を愛せるように、この土地を愛していたのである。

魔術的舞踏が終わり、参加者たちが一人ずつ、あ

るいは二人ずつ、影の中へ消えていった後、私は
円陣の中央へ歩み出た。

そして、自分の交友への望みに、自発的に応じてく
れる者と話をしようとした。

突然、私は威厳ある酋長と向き合っていた。

彼は、一本一本の羽根が勇敢な行為や功績を示し
ている、あの長い羽根飾りを身につけていた。

(なんと見事な習慣だろう！

なんと行動への刺激となる習慣だろう！

まさに赤い人々の間では、行為によって羽根が帽
子へ加えられたのである。)

彼の顔は鷹のようであり、その目は内なる炎によっ

て輝いていた。

そこには、感情と思考が混ざり合った激しい力が存在していた。

それこそが、人々の指導者、支配者となる者だけに見られる特徴なのである。

そして私は、彼の古い言語を一言も知らなかった
ので、思念の形によって彼へ語りかけた。

「私は今夜、意図せずしてあなた方の儀式を目撃
することになった。

その目的について、さらに教えてはくれないだろう
か。

私は、それが呼吸する人間たちの住む土地へ向け
られていたことを見たのだから。」

すると彼は、威厳ある腕をひと振りして、まだ木々の間へ去っていなかった仲間たちを退かせた。

そして、私たち二人だけが残された。

「私は友として来たのだ。」

彼がためらっているのを見て、私はそう言った。

そして、その言葉は真実だった。

なぜなら、彼が誤って害を成そうとしていたとしても、その魂の中には正義への意識——善悪の根本的均衡、精神へ本来備わっている時、それへ威厳と尊敬を与える法の感覚——が存在しているのを私は見たからである。

彼は、先住民的で卑しい呪術へ手を染めるような男ではなかった。

むしろ彼は、報復の司祭のような存在であり、いつの日か、破壊ではなく建設のために用いられるかもしれない部族の半神だった。

それは、以前の手紙で私が語った、アメリカの偉大な霊的存在——我らの国を管理する「破壊の織り手」——の道具となり得る存在だった。

私たちは互いを目で測り合った。

そして私は、先ほど自分の思考へかけていたヴェールを取り払った。

彼が、精神から精神へと私を見て、私が彼を尊重し、ある程度理解していることを知るためである。

「お前は、お前が見たものを見たのだ。」

彼はそう言った。

「では、私の存在を不快には思わないのか？」

「思わぬ。」

松林の新鮮な香りは、私の感覚へ鋭く入り込んでいた。

そして、私の新しい対話相手は、その香りを吸い込むかのように、見事な動作で頭を後ろへ反らせた。

「自由は良いものだ。」

彼は言った。

「そして、この土地は我々のものだった。」

そこで私は理解した。

彼は、自分や仲間たちを弁護することで、私が彼ら

を非難していることを感じ取っていたのである。

その時私は、自分が本当に彼と精神から精神へ語り合えていることを知り、嬉しくなった。

なぜなら私は常に、自分の知識の範囲を広げ、強い意志を持つ者たちと知り合いになりたいと願っているからである。

「しかし、この土地は世界中すべての者に自由なのだ。」

私は言った。

「あなたにも、私にも、そして我々双方の民族にも。」

「我々は、そのようには見ていない。」

それが彼の答えだった。

「だが。」

私はなお主張した。

「今、あなたと私は、この土地を自由の中で共に享受しているではないか。」

私たちの思考の素早いやり取り、互いの間を飛び交った映像を、言葉へ翻訳するのは難しい。

私は親切心と意志をもって、彼へ理解させようと努めた。

彼の民族の幸福は、私の民族の破壊を必要としてはいないのだと。

私は彼へ語った。

そしてその考えは彼にとってあまりにも新しかった

ため、適切な言葉が存在せず、私は思念のキャンバスへ、もっとも細かな詳細まで描き出さねばならなかった。

私は、しばらく地上を離れた魂が、別の姿となって再び戻って来ることを説明した。

そして、彼の民族の何百、何千という者たち——その中でももっとも進歩した者たち——が、すでに物質的身体をまとして、かつて愛したあのアメリカへ戻って来ていることを説明した。

彼らは白人の身体をまとしており、その鋭い目つき、歩き方、そして話し方や振る舞いのある種の特徴によってしか、他の白人たちと区別できないのである。

彼は驚きと、ほとんど苦痛にも似た激しさをもっ

て、私の話を追っていた。

なぜなら彼は、この世界のこちら側ではほとんど欺くことのできない内なる知識によって、私が誠実に語り、自分の語っていることを本当に信じていると知っていたからである。

「だが、お前は自分自身を欺いてはいないのか？」
それが彼の当然の問いだった。

そこで私は、自分がもっとも鮮明に覚えている最近および過去の人生について彼へ語り、自分が自分自身を欺いてはいない証拠を示した。

「しかし、白人の生活とは、我が民の者にとってどんな生活なのだ？」
彼は問い返した。

すると彼は、アメリカにおける単純な白人の生活の光景を、次々と私へ映し出した。

息苦しいほど熱いストーブと悪い空気の学校。
閉ざされた扉と窓を持つ家と家庭。

そして、「集会所」——そこでは、単調で退屈な、あるいは騒々しい説教師が、自分でも理解していない事柄を語り、それを信じている、あるいは信じていると思い込んでいる人々へ話している。

さらに彼は、下層階級の白人たちの衣服を、まるで嘲笑するためのように私の前へ示した。

締めつける不快な靴。

身体を縛るズボン。

頭を禿げさせる醜い帽子。

そして襟。

彼が映し出したのは紙製の襟だった。
端は汚れ、しおれていた。

すると彼は、自分の観察の広さを証明するかのよう
に、都市の事務所を私へ見せた。

そこでは事務員たちが腰掛けに座り、痛む背中を
曲げながら帳簿へ向かっていた。

その帳簿には数字、数字、果てしない数字の列が
並んでいた。

それらは、白人のワムパム——財貨——を示す記
号だった。

そして、それは赤い人々の森で歓びを知っていた
魂にとっては、人生の主要な仕事とされるには、あ

まりにも取るに足らないものに見えた。

「彼らは、このために故郷の土地へ戻って来るのか？」

彼は尋ねた。

「しかし魂は、あらゆる経験を得なければならない。」

私は言った。

その考えは、彼にとって新しいものだったようである。

彼は眉を寄せながら、それについて考え込んだ。

「なぜ魂は、あらゆる経験を得なければならないのだ？」

彼は尋ねた。

「それによって、豊かな知識を持って神のもとへ帰るためだ。」

私は答えた。

「その“神”か。」

その考えに触れた時、彼の奇妙な目は輝きを増した。

しかし、その顔はなお動かなかった。

「そうだ。」

私は言った。

「なぜなら、あなたの神も、私の神も、どちらも神だからである。」

「神々は多く存在する。」

彼は答えた。

「偉大なる精霊があり、そして他の神々もいる。」

「そのすべての中心には。」

私は彼へ言った。

「すべてに共通する一点——心の核——が存在している。

それはあらゆる場所に存在し、あらゆる心の中で一つであり、分離を知らない。

そして、その中心は、あなたの心にも、私の心にも、さらに私たちそれぞれの神々の心にも存在しているのである。」

「お前は、それをあの暑苦しい学校で学んだのか？」

彼は尋ねた。

「いや。

私はそれを、地上で老人になっていた頃でさえ学ばなかった。

こちらへ来てから学んだのだ。

地上では、私はむしろ、自分の“分離性”を誇りに思っていた。」

「では、こちらでは新しい宗教を学ぶことができるのか？」

彼は驚いて尋ねた。

「教師を見つけることができれば。」

私は答えた。

「しかし、なぜ新しい宗教など必要なのだ？」

「すべての宗教の核の中にも。」

私は言った。

「あの中心の一点——すべてが一つとなる場所——が存在している。

そして、すべての民族の中にも。」

私は続けた。

彼が半ば信じながら見つめているのが分かったからである。

「すべての民族の中にも、統一の核が存在している。

赤い人は、白い人の兄弟であって、永遠の敵ではない。

それなのに、なぜあなたは、昔、この土地で自分たちの領地を広げることを正しいと信じていた人々の子孫を傷つけようとするのか？」

「だが私は、傷つけるために傷つけようとしていたのではない。」

「では私は、あなたの魔術的な歌の目的を誤解していたのだな。」

「おお！」

彼は叫んだ。

「お前は、先を見ることのできない我が子らの感情を受け取っていたのだ。」

私の目的は、ただ現在を破壊し、古い生活のため

の道を開くことだけなのだ。」

「しかし現在とは。」

私は言った。

「未来へ至る大いなる道の、一つの段階に過ぎない。

そして、私の民族として再生した者たちも、あなたの民族として再生した者たちも——さらに前進する準備のできた者たちは——共に前へ進むだろう。

しかも、この土地で。

彼らは、海の向こうから来る者たちとも合流し、新しい民族を形成することになる。

そして、赤い人々の伝統と文明を研究し、それを理

解し、完全な消滅から救おうとしてきた少数の白人たちの努力によって、古い森の知恵は、その新しい民族の遺産の一部となるだろう。

その民族は、あなたの民族と私の民族、そして他の民族との結合から成長していくのである。

そして、新しい民族の生活が調和を得た時、人々は一年のある期間ごとに荒野へ出て行き、テントの自由と、焚き火を囲む仲間たちとの交わりを楽しむことになるだろう。

そして私たちは兄弟となる——本当の血の兄弟となる——ついに。

そして、古い傷はすべて癒されるだろう。

あなたは、私を兄弟として認めることができないだ

ろうか？」

彼はうなずいた。

「そして、お前は自分の民へ、“新しい民族”の喜ばしい知らせを広めてはくれないのか。

その民族の持つすべてのものを、彼らもまた共に分かち合うことになるのだと。」

私たちは長い間、互いの目を見つめ合いながら立っていた。

そして私は、もし何時間もあなたの鉛筆を使うことができたとしても、ここへ書き記すことのできないほど多くのことを彼へ語った。

最後には、彼は私を理解した。

私は信じている。

彼はこの話を自分の民へ広めるだろうと。

そしてそれによって、新しい民族の子供たちに対する一つの危険は、ある程度軽減されるだろうと。

LETTER XVII

第十七の手紙

THE IDEAL OF SUCCESS

成功という理想

1917 年 6 月 23 日

恐れをあなた方の心から追い出さない。

未来は、あなた方が克服できないほど大きな課題
を与えたりはしない。

未来を完全な詳細まで知ることは、良いことではない。

もし世界が、この十年間の間に、この戦争で自分た
ちがどれほど苦しまねばならないかをすべて知って

いたなら、芸術や科学や商業において、これほどの進歩を遂げられただろうか。

いや、できなかっただろう。

あらゆる思考が恐怖につきまとわれていたはずだからである。

あなた方は言うかもしれない。

弱い民族(そして強い民族もまた)は、もっと良い準備ができたはずだと。

しかし、この教訓の一部は、「避けられない準備を先延ばしにしてはならない」ということなのである。

そして将来において、戦争を理想化し、ほとんど軍隊そのもののようになっている国家は、その理想や軍隊を、自分たちの娯楽のためだけに育ててきたのではないのだと知ることでもある。

もし国家の人生や個人の人生を理解したいなら、
その支配的な理想を探さねばならない。

理想とは、一つの傾向である。

アメリカの支配的理想とは何か。

一言で言えば、それは「成功」ではないだろうか。

今、アメリカは大戦争の中にある。

そして、この戦争における成功のために役立つこと
なら、彼女は何一つ怠らないだろう。

ちょうど、商業における成功のために役立つことを
何一つ怠らなかったように。

あなた自身の場合を考えてみなさい。

あなたの支配的な理想や傾向とは何だろうか。

あなたは即座に、「仕事、勉強、そして知的な交友関係だ」と答えるのではないか。

よろしい。

仕事について言えば、良い仕事が少なくとも生活できる賃金をほぼ確実に得られる未来を恐れてはならない。

勉強についてはどうか。

あなたの読書への飢えを満たす本は、常に存在するだろう。

交友関係についてはどうか。

この世界には孤独な魂が多すぎるため、あなたが
本当に孤独になることは決してない。

他には何があるだろう。

あなたは鉛筆を持ち上げて考える。
「それくらいしかないのではないかと」。

では再び、アメリカへ話を戻そう。

アメリカは、戦闘的な国家ではない——少なくとも、
不正によって自国や他者が脅かされる場合を
除いては。

では、彼女はこの戦争に敗れるだろうか。

私は、そうは思わない。

しかし、この戦争の終結に関しては、複雑な問題が生じるだろう。

私は、以前の手紙で述べたことへ触れたい。

つまり、私たちが、この空気の境界線のこちら側で、アメリカの未来のための仕事を組織しているという話である。

私は、この土地の霊的存在について語った。

あなた方の想像力が不足しているなら、それを「複合的存在」と呼んでもよい。

しかし、本来あなた方は皆、そのアメリカの霊的存在の身体を構成する細胞なのである。

さて、この土地の霊的存在は、壮大な目的を持っている。

そして彼女は、その目的のために、あなた方すべてを利用している。

それは、あなた方が自分の身体の細胞を使っているのと同じである。

また、今まさに、あなたが鉛筆を持っているその手を形成する細胞の集まりを使っているのと同じである。

祖国の呼びかけに応じて登録するということは、あなた方が、自分たちを彼女の偉大な身体の細胞として受け入れることを宣言しているのである。

彼女は、全体の福祉のために、その中の一部を戦争で犠牲にしなければならない。

それは、人間という小宇宙の身体の中で、毎日細胞が死に、また生まれているのと同じである。

この考えを人類全体へまで広げてみなさい。

そうすれば、この比喩はさらに適切なものとなる。

人類全体の霊的存在は、今、苦しんでいる。

しかし、その過程は最終的に、より完全な健康へ至るのである。

あなたはおそらく抗議するだろう。

死んでいく者たちの多くは、人類の花——若者たち、生き残るにふさわしい者たち——ではないかと。

しかし、彼らの魂が生き残ることを忘れてはいない
だろうか。

彼らの本質的部分は失われてはいない。
それどころか、より大きな仕事のために解放される
のである。

地上の人生こそが夢であり、死後の人生こそが目
覚めである可能性について、考えたことはないだろ
うか。

賢者たちは、あなた以前にそれを考え、その可能性
を受け入れてきたのである。

こちらの世界で、私たちは希望を持っている。
そして非常に忙しく働いている。

私が時折しかあなたのもとへ来ないのは、忙しいからである。

急がせないでほしい。

私もまた、あなたを急がせたりはしないのだから。

こちらにも解決すべき問題がある。

以前述べたように、その一つは、アメリカで白人によって自分たちの民族が消し去られたことへの怨みと復讐心を抱いたまま死んでいった、多くのインディアンの魂たち——赤い人々の魂たち——の問題である。

どうにかして私たちは彼らをなだめ、あなた方の側へ引き入れねばならない。

さもなければ、彼らは未来にとって危険な要素とな

るかもしれない。

彼らの中には、自分たちの文明が破壊されたように、あなた方の文明も破壊されることを望む者たちがいる。

そして、その中の少数は、実際に大きな害を与えられるほど強力である。

敵を無害にする最善の方法は、その敵の特性を理解することである。

その敵意の率直さから何かを学び、悪を斜めへ逸らして通り過ぎさせることである。

しかし、インディアンの魂たちは、率直さで有名ではない。

彼らは、私に対してさえも、その根深く本質的な怨み——かつて自由に歩き回っていた土地を「奪われた」という感覚——を隠すことがある。

私はアメリカへ、自由な野外生活を育てることを勧める。

私は以前の本でも、古い森林生活の知識を復活させ、子供たちへ教えるべきだと勧めた。

いつの日か、この知識の初歩が、あなた方の多くにとって役立つ時が来るかもしれない。

世界には大きな変化が訪れつつある。
それは、新しい状況へ適応する時代である。

あらゆる適応には落ち着かない要素が伴う。

そして国家的な落ち着きのなさは、思春期のそれに似ている。

それは、健全な野外遊び、あるいは遊びのように見える仕事によって和らげられねばならない。

未来は、現在から、生き残りにとってもっとも重要な要素を取り出していこう。

私たちが暗黒時代へ戻るのではないかと恐れてはならない。

いや、決してそうではない。

私たちは「光の時代」へ向かっているのである。

今は、まだ黄昏に過ぎない。

LETTER XVIII

第十八の手紙

ORDER AND PROGRESS

秩序と進歩

1917 年 7 月 18 日

私たちの目的は、起こらねばならない変化を、徐々に起こさせることである。

私たちは突然の変化を避けたいのである。

あなた方地上の人間には、こちら側で私たちがどれほどの影響力と力を行使できるか、ほとんど想像もつかない。

私たちは、人々がその考えの出所を知らないまま、

その精神へ語りかけることができる。

人々は、突然ある考えが心へ浮かぶと、自分でそれを生み出したのだと思う。

しかし、突然の着想というものは、たいてい外部から来るのである。

(私は今朝、あなたの心へ一つの考えを入れた。
そして、あなたが私に気づく前に逃げ去った。

なぜ逃げたのか？

それは、あなた自身の判断力を使ってほしかったからである。)

ちょうど今、私たちは、アメリカが自らの未来——ヨーロッパで平和が宣言された後の、秩序ある平和な未来——について希望を持てるよう励まそうとし

ている。

知っておいてもよいだろう。

こちら側には、世界の未来について不安を抱いている者たちも多い。

すべての人間が、肉体を離れたからといって心配をやめるわけではない。

こちらには、世界が崩壊してしまうと思っている者たちも多くいる。

彼らは生前から、物事が悪く見えるたびにそう恐れていた。

そして今もなお、あらゆる困難を失敗と混乱の前兆として受け取ろうとする傾向を持っている。

アメリカ中には、この戦争の後に社会が崩壊すると

騒ぎ立てている男や女たちがいる。

しかも、その多くは説教壇や演壇の上に立っている人々である。

ああ、悩めるあなた方の心よ！

社会は滅びたりはしない。

社会の中のある要素は徐々に消えていくだろう。
そして、それらが消えることは喜ばしいことである！

しかし社会は、機械的にも知的にも、あまりに大きな進歩を遂げているため、その土台が突然引き抜かれるようなことはない。

心配してはならない。

警戒はしなさい。

しかし、心配してはならない。

かつてエイブラハム・リンカーンが、この国が領土的に分裂し、弱体化するのを防いだように、今、彼や他の者たちは、さらに危険な「霊的分裂」を防ぐために働いている。

いや、未来が必要としている有用な発明や建造物が、無謀な暴力や浪費によって、がらくた置き場へ投げ込まれるようなことにはならない。

有用なものは保存されなければならない。

未来に不要なものは、何か有用なものへ作り替えればよいのである。

人類は、突然の大跳躍を行う習慣を持ってはいなかった。

人類は、一歩ずつ規則正しく足を前へ出し、かなり着実に進んできたのである。

これまでの人類のやり方は、制度や、さらには衣服でさえ、突然捨て去ることではなく、改良し、作り替えることだった。

本当に使い古されたものだけが捨てられるのである。

そして、私たちの金融制度も、社会制度全体も、捨て去られるのではなく改良されるのである。

あなた方は、私たちがワムパムの時代へ戻っていたのか？

いや、決してそうではない！

こちら側から、そしてかつてあなた方の大陸に住んでいた者たちから、アメリカの生活を簡素化しようとする強い力が働いている。

しかしアメリカは、もはや孤立してはいない。

彼女は今や、国家共同体の一員となっているのである。

かつてアメリカ先住民だった魂たちの中には、アメリカがティピーと焚き火の生活へ戻ることを望む者たちもいる。

なぜなら、その魂たちは再び戻りたいと望み、現代アメリカ生活の複雑さを恐れているからである。

しかしこちらには教師たちがいる——その中には赤い民族の教師たちもいる——彼らは、まだ準備のできていない魂たちへ適応力を教えることができる。

私は以前、アメリカを後戻りさせようとする影響が存在すると語った。

しかし、その事実によって恐慌状態になれとは言わなかった。

あなた方の世界にさえ、反動主義者たちは存在しているのだから。

こちら側からの影響は微妙なものである。

しかし、世界を導こうとしているこちら側の大多数

は、世界を後退ではなく前進へ導こうとしている。

世界は前へ進むだろう。

そう、あなた方が「死者」と呼ぶ魂たちは、自らを組織化し始めている。

彼らは、自分たちの影響力が、目的と計画を持つことでより効果的になると理解しているのである。

戦争が始まった直後、こちら側には大きな混乱が存在した。

しかし今、物事は次第に秩序立ってきている。

精神は、より統一されつつある。

私たちの中で、常識とある程度の政治的判断力を持つ多くの者たちは、今や、その時間の大半を講

演活動へ費やしている。

私たちは、人を集められる場所ならどこでも講演して回っている。

それが、最近あなたが私をほとんど見なかった理由の一つである。

私はこれまで以上に忙しかったのだ。

そして、近いうちに現在の労働から休める時が来ると知っているため、私は生み出した力をすぐに使い切るほど働いている。

なぜなら、私によって、「アメリカや他の国々は前進している——さらに大きな活動へ向かって進まねばならない」と納得した者たちは、今度は彼ら自身が他者を説得しようとするからである。

地上のどんな講演家も、私がこの一か月間過ごしたほど忙しい一か月を経験したことはないだろう。

私は毎日何度も、何百人もの前で話した。
場所から場所へ、州から州へ、都市から都市へ移動しながら。

私は朝にはサンフランシスコで話し、正午にはニューヨークで、二時にはニューオーリンズで、夕方にはモンタナ州ビュートで話すことができる。

私は鉄道の時刻表に縛られていない。
そして運賃も払わない。

信じてほしい。

私たちはアメリカを救うつもりでいる。

そして世界を救うつもりでいる。

なぜなら、師たちが私たちの背後にいるからであり、彼らは世界が滅びることを許さないからである。

私は、この三年間の間に、世界がどれほど何度も滅亡寸前まで近づいていたかを、あなたへ知らせたいとは思わない。

しかし、私たちが長い間戦ってきた、計画的な悪の力は、今や散り散りになった。

それらは完全に滅ぼされたわけではないが、その影響力は大きく弱められている。

今、私たちが恐れる理由を持つものは、世界へ善を望んでいると思い込んでいる者たちの愚かさである。

つまり、狂信者たち、扇動者たち、そしてあらゆる種類の騒ぎ好きな者たちの愚かさである。

彼らは混乱をかき立て、実際性のない互いに矛盾した考えによって、人々の判断を暗くしている。

秩序、秩序、秩序！

この戦争の後に訪れる反動の時代において、世界が目指さねばならないのは、それなのである。

その反動は、考慮へ入れておかねばならない。

しかし、それは、疲れ切った心たちがしばし休息す

る短い期間に過ぎず、その後、彼らは再び建設を始めるだろう。

私は、その建設の時代において、アメリカへ希望を抱いている。

なぜなら、アメリカは、偉大な世界的兄弟関係の他の構成員たちほど疲弊してはいないからである。

しかし、その時代のアメリカには、一つの危険が存在するだろう。

私は、あなた方が不意を突かれ、警戒を緩めてしまわないように、そのことを告げているのである。

注意深くありなさい。

しかし、過度に不安になってはならない。

そして、生命の師たちが、何らかの形であなた方を
導き抜いてくれると信頼しなさい。

LETTER XIX

第十九の手紙

THE FEDERATION OF NATIONS

国家連盟

1917 年 8 月 9 日

今や、アメリカが世界へ出て行き、国家連盟の中で
自らの地位を占める時が来た。

彼女はイングランドと強い絆で結ばれるべきであ
り、それによって世界の平和を保つことができるだ
ろう。

過去におけるアメリカの孤立は、彼女の運命に沿っ
たものだった。

彼女が現在の力の段階まで成長するには、中断や、国際的な複雑な問題が政治家たちへ及ぼす影響なしに発展する必要があったのである。

自由で独立していたため、彼女は国際外交や陰謀という巨大で軋む機械の一部となる必要がなかった。

しかし今、彼女は独立を達成した。
そして政治的に言えば、その性格は形成されたのである。

あなた方は、「アメリカは成人へ達し、世界の会議や選挙で投票する資格を得た」と言うこともできるだろう。

彼女には、フランスとイングランドの双方のために行うべきことが多くある。

なぜなら、その両国は、過去において彼女のために非常に多くをしてきたからである。

彼らはアメリカの文化を形成し、その精神へ影響を与えてきた。

そして今度は、アメリカが彼らの精神へ影響を与えることになる。

先日、あなたは、我々の兵士たちがフランスで行っている仕事について読んだ。

彼らは村々や農場で、多くの小さな助けを行っている。

その時、あなたの心は喜びで満たされた。

そして、アメリカが戦争へ参加する以前に、私があ

なたへ語ったことを思い出した。

つまり、我々の男たちはフランスへ行き、フランス再建のために、働き、働き、働くことになるのだという言葉。

しかし、それはまだ始まりに過ぎない。

戦争中も、戦後も、我々の男たちは、ますますあの地で働くようになるだろう。

やがて、新しい種類の仕事への呼びかけが来る。

それは、我々にとって新しいものとなるだろう。

国家たちが共通の目的のために結び合わされていることには、深い意味が存在している。

そしてそこから、「すべての国家が一つの目的のために結びつく」ということまでは、ほんの一步に過ぎない。

世界に存在する反乱の力は、やがて使い果たされねばならない。

それは、人種的憎悪の力が使い果たされたようにである——いや、すでにそれは使い果たされている。

この戦争の継続は、もはや開始当初の激しい怒りをほとんど伴っていないだろう。

私たちは、それが自分たちの仕事だから続けているのである。

そして今では、ニューヨークでさえ、二年前のよう

な激しさは存在しない。

イングランドでも、その激しさは弱まっている。

フランスでも弱まっている。

ドイツでも弱まっている。

戦争は今や、ただ終わるべき一つの仕事のようなものになっているのである。

それがもはや価値あるものに見えなくなった時、戦争は止まるだろう。

今、私の関心を引いているのは、国家連盟におけるアメリカの役割の問題である。

LETTER XX

第二十の手紙

THE NEW IDEAL

新しい理想

1917 年 8 月 19 日

ドイツが、けばけばしい国家主義という理念を作り上げ、それを帝國的なやり方で世界へ押し付けようとして以来、世界は国家崇拜という偶像に対して懐疑的になった。

世界は、友であれ敵であれ、自らの優秀さを誇示する国家や民族の善意を信じなくなっている。

アメリカは、自らの高い運命をますます確信するようになるにつれて、同時に、より謙虚にならねばな

らない。

彼女は、自分を「国家共同体という大いなる連邦」の中の姉妹国家の一つとして理解しなければならない。

そして驚は、声の鍛錬を学ぶことになるだろう。

静かな声が、騒音の入り混じった場所でも聞き取られるのに対し、叫び声は逆に聞こえなくなることがある。

それと同じように、アメリカの声も、深く静かなものにならねばならない。

彼女は、世界会議における自らの地位のために代価を払っている。

ならば、その声は、威厳と節度を備えた響きによって聞かれるべきである。

今、ヨーロッパでは、「アメリカ人の性格」に対する理解に大きな変化が起きている。

これまでフランスが知っていたのは、アメリカ人旅行者と、自国よりもフランスを好んで住む、根無し草のアメリカ人だった。

しかし今、フランスは、働き、遊び、戦い、愛し、生き、そして死ぬアメリカ人の崇高さについて、何かを学び始めている。

彼女は彼らを見つめながら、自分が夢を見ているのではないかと目をこすった。

彼女は、新しい型の人間を認識したのである。

まだ彼女はそれを理解してはいない。
しかし理解したいと願っている。

今、フランスの心には、海の向こうから来たこの新しい兄弟に対して、新しく、そして心を乱すような温かさが存在している。

彼女は見ている——なぜなら彼女は繊細だからである——より人工的な自らの基準から測れば、彼の粗野さを。

しかし同時に、彼女は彼の壮大さと騎士道精神も見ている。

それは、彼女が以前抱いていた外国人像とはまったく異なるものだった。

ああ、アメリカよ、アメリカ人たちよ！

あなた方は今、かつてないほど、世界の審判の法廷で試されている。

私は、我々の若者たちが、アメリカの平原と森林の澄み切った野外精神を携えながら、より大きな世界へ出て行くのを見る時、胸が熱くなる。

苦難によって浄化された崇高なフランス人たちの目が、我々の若者たちへ向けられる時、その眼差しが深く温かくなるのを見ると、私は彼らを誇らしく思わずにはいられない！

私は、自分自身もまた根を失った存在であり、生まれた土地を離れて死後の領域へ来た者であることさえ忘れてしまう。

戦争の終結時、そして戦後の会議において、偉大

さに伴う謙虚さが、アメリカに、「自分たちがフランスやイングランドを滅亡から救ったのだ」というような示唆をさせないように願う。

私は、これから来る会議において、アメリカが正しく導かれるよう祈りながら、感情の高まりのあまり、両手を組み合わせる。

あなた方には、それは影のような手に見えるだろうが。

謙虚さ——それを合言葉としなさい。

フランスの魂は、感謝によって燃えている。

フランスの魂は、愛によって燃えている。

夜になると、フランス人たちの心は温かくなり、その目は涙で潤む。

そして彼らは小声でつぶやくのである。

「レザメリカン！ レザメリカン！」——「アメリカ人
たち！」と。

ああ、あなた方が勝ち取った愛を忘れてはならない！

私は、自分のアメリカ人たちが、この世界的危機においてフランスの兄弟たちを失望させるのを見るくらいなら、千回でも再び死ぬことを選ぶだろう。

あなたは、なぜ私がイングランドについて何も語らないのか不思議に思うだろう。

ああ！

イングランドは、すでにあなた方を知っているから

である。

イングランドは、長い間あなた方を知ってきた。

あなた方はイングランドを驚かせることはできない。

彼女は、母親が息子や娘を知っているように、あなた方を知っている。

しかしフランスにとって、あなた方は神秘的なのである。

助けに来た神秘、カーキ色のシャツと柔らかな帽子を身につけ、見慣れない声を持つ天使なのである。

分からないだろうか？

彼女はあなた方のために祈っている。

もし彼女が、自分の愛に対してそこまで恥じらい深くなかったなら、あなた方へ祈りを捧げていたことだろう。

彼女の目には、新しく不思議な驚きが宿っている。
そして、彼女の全身には甘い震えが走っている。

ああ、国家同士の兄弟愛を高めなさい——これまで一度も完全には実現されなかった理想を！

自由な世界で育った若者から、「アメリカは自由であり、そして永遠に自由でなければならない」という深く根付いた考えを奪うことはできない。

かつて、この土地の息子たちは自由のために死んだ。

自分たち自身の自由のために、そして黒人の自由のために。

そして今、彼らは世界の自由のために戦い、死んでいる。

自由であるとはどういうことか、あなたは知っているだろうか。

自制できる人間だけが自由なのである。

無法状態は自由ではないからである。

無法状態とは常に、暴君のような情念に繋がれている状態なのである。

私が地平線のすぐ向こうに見ている新しいアメリカでは——私の目はあなた方より遠くまで届くので

——個人の理念が最大限発展する余地が存在するだろう。

そして同時に、社会的責任という理念が、それを安定させることになる。

これまで、個人主義は暴走してきた。

少数の者たちが食料を蓄え込み、多くの者たちが不足に苦しんでいる様子を見なさい。

また、この悲劇的な機会から、それぞれの利益集団が自分の利益を得ようとして争い合う様子を見なさい。

戦争が終わる前に、人々の心は、その知性とともに働かなければならない。

古い世代——個人的利益への希望によって、大陸を鉄道で取り囲んだ世代——は、今や消えつつある。

そして、その古い「産業界の指導者たち」に続く新しい人々は、新しい理想を垣間見ることになるだろう。

私よりもさらに多くを知る者から聞いた話によれば、先見性と行動力によって産業アメリカを築き上げた人々は、彼ら自身には理解できない世界的目的のために、その野心ごと利用した存在たちによって導かれ、刺激されていたのである。

LETTER XXI

第二十一の手紙

A RAMBLING TALK

とりとめのない話

1917 年 11 月 16 日

今夜の私は、文学的な気分ではない。
だから、少しとりとめのない話し方になるかもしれない。

あなたは、アメリカが引き受けた事業の重大さを理解しているだろうか。

自分では理解しているつもりだろう。

しかし、この問題が最後に完全に整理される時に

は、あなたを驚かせる出来事が待っているかもしれない。

ロンドンにある自分の持ち物について心配してはならない。

ロンドンは広大であり、かなり多くの爆弾が落ちたとしても、その大部分が破壊されることはない。

そう、私は二年半ほど前に語ったことを、今もう一度はっきりと繰り返そう。

ドイツでは内部的な混乱が起こるだろう——そして他の場所でも同様である。

世界は作り替えられようとしている。

恐れてはならない。

世界が作り替えられることは、あなたを傷つけたりはしない。

人類は、変化をととても恐れる。

しかし人類という種族は、これまでに多くの変化を経験してきた。

その中には、現在の変化よりもさらに劇的なものが、先史時代に存在していたのである。

人類には長い歴史がある。

そしてその大部分は、あなた方が読める書物には記録されていない。

そう、世界は統一されるだろう。

そして同時に、世界は分割されるだろう。

おそらく、それは逆説のように聞こえるかもしれない。

今夜の私は休息しているので、少し話が飛び飛びになる自由を許してほしい。

あなたは、常にこのような静かな場所で暮らすべきである。

物事を中心から少し離れた場所で。

あなたは、ニューヨークであれ他の大都市であれ、街の中心の喧騒と群衆の中で生きる人間ではない。

内なる感覚を発達させた者たちは皆、少し離れて暮らすべきである。

それは、全員が隠者になるべきだという意味では

ない。

しかし、都市の外れに住むべきなのである。

群衆を求める気持ちが湧いた時には、その中へ出て行けばよい。

に、この本がゆっくり進んでいるからといって心配しないよう伝えなさい。

あなたは時間と競争しているわけではない。

世界は進み続ける。

そしてあなたもまた、それと共に進むのである。

そのことを疑ってはならない。

世界は非常な速さで進んでいる。

これらすべての新しい「霊的」書物は、世界が急速に進んでいる証拠なのである。

数年前なら、どんな出版社もそのような本を出版しようとはしなかっただろう。

あなたの頭が少しくらするの無理はない。

あなたは、戦争が始まって以来、多くの個人的な友人たちを「失った」ことに強い印象を受けている。

しかも、その死は戦争とは無関係に見えた。

しかし彼らは、これから来る新しい世界へ適応できなかった者たちなのである。

彼らの「沈黙の監視者」が、彼らを連れ出している

のだ。

あなた方一人一人にも、沈黙の監視者が存在している。

それは、あなた自身の一部でありながら、あなたを超えた存在であり、しかもあなたのすべての部分の中でもっとも真実なる部分である。

宇宙の監視者たちは、いつも以上に注意深く見守っている。

あなた自身の監視者もまた、世界だけでなくあなた自身を見守っている。

そして、何か重要な行動が必要になった時には、必ずあなたへ知らせを与えるだろう。

世界は、「死者が生者と語ることができる」という考えに順応しつつあるように見える。

しかし、それは知識の始まりに過ぎない。

戦争のもっとも激しい部分が終わり、人々が平和へ適応し始める時、彼らは自分自身を知ろうとするだろう。

そして彼らは、自分たちの身体や魂が、自分自身の一部分に過ぎないことを発見するだろう。

彼らは、物質やさらに微細な実体の階層が存在するのと同じだけ、多くの存在階層において生きているのである。

そして、それらの自己の一つ一つが、鏡に映る人格と同じほど現実的な存在なのである。

彼らは、それらの間に繋がりを作り、通信の橋を築く方法を学ぶだろう。

最終的には、彼らは意識的に完全な存在となるのである。

いつの日か、歓びが世界へ戻って来る。

それは、世界がこれまで一度も知らなかったような歓びである。

そして、いつの日か、あなた方は再び生きていることを喜ぶようになるだろう。

そう、私は「あなた方すべてが」と言っているのである。

アメリカに留まらねばならないことに不満を抱いてはならない。

今のところ、アメリカは居るべき良い場所なのである。

世界は、アメリカの効率性に驚き始めている。

彼女は、友邦たちが従わずにはいられなくなるような模範を示している。

そしていつの日か、彼女はもっとも高い模範を示すことになるだろう。

LETTER XXII

第二十二の手紙

THE LEVER OF WORLD UNITY

世界統一のてこ

1917 年 11 月 19 日

あなたには、アメリカの統合する力が、すでにこの戦争の中で感じられているのが見えないだろうか。

アメリカが、アメリカ合衆国大統領を通じて、連合国を結びつけている様子が見えないだろうか。

それこそが彼女の運命なのである。

すべての国家を、民主的自由と相互扶助の兄弟関

係の中へ集めること。

この戦争遂行のために、統一された行動を取るための会議を求めたウィルソン大統領の要求は、歴史上もっとも重要な出来事の一つである。

初めて、友好的な国家群が、本当に一つとなって働くことが可能になるかもしれないのである。

個人的な嫉妬や恐れをすべて脇へ置き、世界的な偉大な目的のために。

それは、世界統一の「てこ」なのである。

そしてそのてこは、これまで世界の労働の成果の半分以上を失わせた浪費という重荷を持ち上げるだろう。

ああ、ヨーロッパの諸国家よ、水の向こうにある偉大なる自由の国を恐れてはならない！

彼女は、あなた方から何も望んではない。

ただ今は、あなた方が自分自身を救うのを助ける特権を。

そして未来には、あなた方をすべて強くする理想のために、共に働くことを望んでいるのである。

アングロ・サクソン民族は、再び一つの家族のようにならねばならない。

たとえ二つの家に住んでいたとしても。

しかし、やがてアメリカが、外国から来た住民たちを自らの中へ溶け合わせ、分かち難い一つの民族となった時、彼女はなおもあなたの姉妹であり続けるだろう。

おお、ブリテンよ！

そしてあなた方二国は、世界をさらに啓発するために共に協議することになるだろう。

時として私は、エーテル的領域の高みへ昇り、そこから地球を見下ろす。

あまりにも高く昇るため、地平線は次々と半球を包み込む。

時間の地平線もまた、そのように広がる。

そして私は、現在という瞬間の前方と後方を見るのである。

私は、世界を現在の行き詰まりへ導いた原因を見

る。

あなた方は、「啓発された兄弟愛の時代」と自分たちを隔てている壁を取り除かねばならない。

あなた方は、過去の黄金時代について読んだことがあるだろう。

あなたは、それが暖炉の火のそばで子供を楽しませるための空想話だと思っていたのだろうか。

私は告げよう。

それは、いつの日か再び実現される。

しかも、この地上において。

今は憎悪と戦争によって引き裂かれている、この地上においてである。

あなた方は、地球の鉱山から得たものや、自分たち自身の頭脳の活動によって勝ち取ったものを、すべて保持しなければならない。

発明も芸術も、すべて、これから来る新しい時代の中でその場所を持つだろう。

そして、これまで想像もされなかった芸術と科学が、人生の栄光と快適さへさらに新しいものを加えるだろう。

魂にとって価値あるものを失うなら、それはあなた方自身の愚かさと盲目さのせいなのである。

魂は物質を必要としている。

そして物質もまた、魂を必要としている。

私たちは、憎悪と無駄な分裂のない時代を待ち望んでいる。

しかしそれは、怠惰と無気力の時代を意味するわけではない。

天才にも、才能にも、野心にも、無限の機会が存在するだろう。

地上でもっとも偉大な貴族制とは、精神と魂の貴族制である。

そして精神と魂は育成されることになる。

未来の教育は、実用的であるだけではなく、人間的なものとなるだろう。

美や思想へ役立つものは、何一つ捨てられない。

死んだ言語の宝も、塵箱へ投げ込まれたりはしない。

世界の物質的必要を満たすために必要な労働の後には、芸術や美、学問、社会的討論、そして宗教的高揚のための時間が残されるだろう。

神秘家にもまた、その居場所が存在する。

三年前なら、私は、この悲劇的な大混乱に幸福な結末が訪れると予言する勇気を持てなかつただろう。

しかし二年以上前、私はあなたへ語った。

この戦いは、すでに地上を超えた領域で勝利しているのだと。

それは、人類の幸福のために働く善の力によって
勝ち取られたのである。

どうして、あなたは疑うことができるのだろう。

もし戦争が二年前に終わっていたなら、世界は以前とほとんど変わらぬ形で進み続けていただろう。

しかし今、世界はもはや昔の利己的なやり方へ戻ることはできない。

戦後に訪れる必要の時代において、民族同士は互いを助け合うだろう。

彼らは、兄弟姉妹が互いへ向き合うように、互いへ向き合うことになるのである。

この悲劇の中から、世界が長く望んできた報いが
生まれるという信念を、決して失ってはならない。

私はそれを見ている。

私はそのために生きている。

——いや、私はあなた方よりも、さらに力強く生き
ているのである。

そして、あなた方もまたそれを見て、そのために生
きられるように、私は闘っている。

私の今の身体は軽やかであり、その軽さは、あなた
方地上の人間たちが苦しみ祈っている、この濃密
な領域から私を遠ざけようとする傾向を持っている。
る。

私は、その力に抗いながら闘っているのである。

私が下位アストラル界から手紙を書き、見知らぬ国を旅する旅人のように、自分が見たものを描写していた、あの初期の日々から私について来たあなた方。

戦争初期の数か月間、アストラル界の混乱した地獄を私が通り抜けた時にも、私について来たあなた方。

もう少しだけ、私について来なさい。

私は、自分に示された通りに、その道をあなた方へ示そう。

そしてあなた方もまた、その道を歩むことになる。

最初はずまずきながら、そして再建という迷宮の中

で、目的の糸を手探りで探しながらではあるが。

その時代は、「平和の時代」と呼ばれることになるだろう。

だが、完全な平和はすぐには訪れない。

あなた方は、戦争における勝利のために働いたように、平和のためにも働かなければならない。

しかし、もし信仰を持つなら、あなた方は荒れ狂う海を越え、新しい地の港へたどり着くだろう。

そして新しい天が地上に広がるだろう。

なぜなら、天とは主として下界から住民を迎え入れている場所だからである。

天は、その人口を下界から補充している。

今、新しい天使たちは創造されてはいない。

外へ向かう呼吸は休息し、内へ向かう呼吸が始まろうとしている。

「ヨガの呼吸法」を実践したことのあるあなた方は、呼吸を吐いたまま長時間保つことが、どれほど困難か知っているだろう。

それは、意志の力によってしか維持できない。

呼吸には戻ろうとする傾向がある。

それと同じように、人類にも、自らが生まれ出た源へ戻ろうとする傾向があるのである。

だから私は言うのである。

人類という種族の呼吸が、調和と平和と愛へ向かって流れていくのを、あなた方はほんのしばらくの間しか遅らせることはできない、と。

人間同士が、分離という利己心の中で争うこの姿は、若く未熟なヨギが、吸気を行わないよう無理に耐えている姿に似ている。

しかし、賢明なヨギは、定められた間隔で呼吸し、その周期が満ちた時を知っている。

人類という種族もまた知っている。

それは、流出と流入の法則に従うことになる。

あなた方には、それを止めることはできない。

だから、自分自身を、その流れに委ねなさい。

あなた方を神へ戻そうとしている、その流れに。

それは急ぎの旅ではない。

なぜなら、内へ向かう呼吸もまた測られているからである。

そこには、労働のための時間も、休息のための時間もある。

そして道すがら花を摘む時間もある。

あなた方は、神への帰還を恐れるのだろうか。
たとえそれがどれほどゆっくりしたものであったとしても。

死を経験した私には、恐れるべきものが何一つないことが分かっている。

そして新しい生命を味わった私が、あなた方へ告げよう。

そこには、希望すべきものがすべて存在しているのである。

LETTER XXIII

第二十三の手紙

THE STARS OF MAN' S DESTINY

人類の運命の星々

1917 年 11 月 24 日

世界の進歩を司っている力が、定められた時に避けることのできない目的を達成するために、あなた方の望みに反する方法を用いざるを得ないことがある、ということを考えたことがあるだろうか。

人間は、宇宙的進歩の流れに反抗することによって、その進行を一時的には遅らせることができる。

しかし、その波が十分高くなれば、人間は自分の意思に反してでもその波に運ばれて行く。

そして、避けることのできない結果が、彼の反抗にもかかわらず生み出されるのである。

この戦争を見なさい。

世界の時計において、人種や民族が共通の目的のために協力すべき時刻が、すでに訪れていたのである。

しかし彼らは、それぞれが世界の利益の分け前を得られなくなるのではないかという恐れから、それに反抗した。

そのため、世界は共通の敵によって攻撃されることとなった。

そして諸民族は、「文明を破壊の脅威から守る」と

いう共通の目的のために、結束せざるを得なくなつたのである。

この戦争は防ぐことができただろうか。

未来を見通す力があつたなら、できただろう。

しかし、そのような予見を持ちながら、なおかつ人々から真剣に耳を傾けられるほどの影響力を持つ者は存在しなかった。

世界から高く評価されている人々は、たいてい、自分自身の仕事や個人的野心へあまりにも集中し過ぎていてる。

そのため、彼らは、私情を離れて見る能力や、世界全体を見る能力を失ってしまっているのである。

自国の傾向を全体として見ることのできる者はい
る。

しかし、世界全体の流れを見ることのできる者はほ
とんどいない。

そして今、私はあなた方へ告げよう。

この世界戦争が終わった時、もし諸民族が「すべての者の利益のために、一つの連盟として結束する必要性」を認識しなかったなら、四十年後には、あの驚異的な十九世紀に成し遂げられたものの大半は、ほとんど残っていないだろう。

十九世紀——それは、物質的進歩が、それ以前の二千年間に匹敵するほどの発展を遂げた時代であった。

人間は、自分の運命の星々を見るためには、頭をハンマーで殴られなければならないのだろうか。

もし人間が、全体の利益のために働こうとしないなら、その「全体」そのものが脅かされなければならない。

そして今まさに、それは脅かされているのである。

もしあなた方に、それを見ることができるならば。

LETTER XXIV

第二十四の手紙

MELANCHOLY

憂鬱

1917 年 12 月 23 日

私は、憂鬱について書きたい。

消化不良や神経への圧迫によって生じる落ち込みではなく、ときとしてもっとも優れた精神や、もっとも強い心の上へ降りて来る、あの暗い雲についてである。

それはしばらくの間、その人をあらゆる目的に対して無力にしてしまう。

——ただし、「憂鬱そのものの体験から知識を引き出す」という目的を除いては。

すべての悲しみが、悲しんでいる本人の心から生じるわけではない。

そして、憂鬱の基礎である恐れは、地上の魂へ、地上を超えた場所にいる魂から送り込まれることもある。

あなた方には、この大虐殺によって、どれほど多くの不満と恐怖に満ちた魂たちが、目に見えない領域へ放たれたか分かっていない。

彼らは地上の感受性の強い魂たちの周囲へ群がり、「自分たちの苦しみを語りたい」と願い、同情と助けを求めている。

彼らは、あなた方の世界にいる多くの人々と同じように、自立してはいない。

そのような人々は、存在するだけで、より強い人間を憂鬱にってしまう。

だから、あなたがあの憂鬱の雲を感じた時には、立ち止まり、その原因を確かめなさい。

あなたは、「暗示」がどのように働くかを観察してきただろう。

もし、自分の環境や状況の中に、絶望する理由が何も見つからないなら——そして胆汁質でもないなら——その雲は別の場所で生じ、ただあなたの上へ降りて来ただけだ、と考えても安全ではないだろうか。

いつの日か——たとえそれが未来の多くの人生の先であったとしても——達人となることを望む学徒は、今からすでに、自分の思考と感情を制御し導く訓練を始めた方がよい。

あなたは、望まない限り、憂鬱になる必要はない。

最悪の憂鬱の発作さえ追いつめることのできる文章、真言、格言、さらには習字帳の標語のようなもののさえ存在する。

それらを思い出し、黙想すればよいのである。

いくつか挙げてみよう。

「快樂と苦痛とは、一つの力の反対表現である。」

「私は神の一部であり、神には害が及ばない。」

「この不満という井戸の中に隠されている真実とは何か。」

「もし私がこの真夜中の大地を十分深く進めば、反対側へ出て、そこでは太陽が輝いているだろう。」

「私は昨日幸福だった。そして今もなお、私は私である。」

「怯えた犬は、決して泥棒を追い払えない。」

「もしこれらすべての災難が私へ降りかかるなら、それらを克服することは力の訓練になるだろう。」

——おそらく、それほど深遠ではないだろう。

しかし、望むなら、あなた自身でさらに良いものを

書くこともできる。

私はただ、「恐怖の重荷を振り払う方法」の一例を示しているに過ぎない。

なぜ、あなた方人間は何かを恐れる必要があるのだろう。

死でさえ、恐れている時にだけ恐ろしいのである。

マスターたちは困難を楽しむ。

困難とは、彼らの熟達という黄金を試す酸なのである。

そして、より低い段階から語るなら、どんな困難なことを行うにも喜びが存在する。

なぜなら、大作の小説を書くことには、ある大きな不幸を乗り越える以上の、精神的・肉体的労力が存在するからである。

迫り来る不幸を外へ出て克服する方が、短編小説を書くよりも、むしろ労力は少ないのである。

健康で、しかも普通程度の能力を持つ人間が、どうして憂鬱に屈することができるのか。

それは哲学者にとっての問題である。

今、私が語っているのは、死んだ友人への悲しみではない。

あるいは偽りの友人への悲しみでもない——こちらの方が、はるかに悪い悲しみだが。

私が語っているのは、おそらく決して起こらないであろう、想像上の災難への恐れについてである。

災難を引き寄せるもっとも確実な方法は、それを想像することである。

あなたは、十分強く想像するなら、ほとんど何でも創造できる。

喜びや勇気さえも。

あるマスターはかつて私へ、「憂鬱を制御し追い払うことは、欲望を制御すること以上に、大きな力の試練である」と語った。

その両方とも、しばしば外部から来る。

受け身で感受性の強い心へ送り込まれるのであ

る。

さて、マスターは、自分の目的を強めるような暗示しか受け入れない。

もし、ただそばにいただけであなたを勇敢にする友人がいるなら、その人との交友を深めなさい。

もし、あなたを憂鬱にする友人がいるなら、その人をより良く教育するか、さもなければ遠ざけなさい。

医者へ送るのである。

もし、自分たちの気分を支配する力すら持たないなら、神秘的な力について語って何の意味があるのだろうか。

まず、気分を相手に訓練しなさい。

訓練として、活動的な時には、わざと怠けてみなさい。

そして、怠けていて、しかも疲れてはいない時には、わざと活動的になりなさい。

自然な疲労は、あまり無理をして押し進めるべきではない。

それは単なる反作用だからである。

しかし怠惰は疲労ではない。

怠惰とは、肉体において、精神における憂鬱と同じものなのである。

別の訓練として、あなたの心が何かの周囲をぐるぐる回り続けている時には、電灯のスイッチを切るように、それを切り離してしまいなさい。

向きを変え、別のことを考えるのである。

あなたには、それができる。

それから、ついでに言うておくが、憂鬱に対するもっとも良い治療法の一つは、一時間ほど数学計算をすることである。

私は断言する。

幾何学や三角法の腕の中にいる時、人は憂鬱ではいられない。

なぜだろうか。

数学的な用語で考えながら、同時に自分自身のことを考えることはできないからである。

人は、憂鬱な時には、常に自分自身について考えている。

しかし、あなたは言う。

先日、仕事を失った友人のことを考えて憂鬱になったのだ、と。

もう一度よく考えてみなさい。

その友人のために自分が何をできるか、そしてそれを自分に負担できるかどうかを考え始めた時、あなたは恐れ始めたのである——そうではないだろうか。

友人が困難の中にいるために、悲しくなることはあるだろう。

しかし、憂鬱になるのは、結局のところ、自分自身のためだけなのである。

他人は、あなたを病的で恐れ深い気分にすることによって、あなたを憂鬱にすることができる。

私たちの思考は、自我に強く鎖で結ばれているため、長い間そこから逃れることが難しい。

しかし、あなたは、本の中の場面を想像力で創造している時に、憂鬱になるだろうか。

あるいは、惑星の「極高度」を計算している最中や、あの「逆行プライマリー・ディレクション」を計算

している最中に、憂鬱になるだろうか。

あなたが微笑んでいるのが見える。

数字を扱っている時、あなたは自分自身を忘れて
いるのである。

だから、私の助言を受け入れなさい。

自己暗示が憂鬱を克服できない時には、昨日あなたが使っていた斜交昇度表を用いて、低緯度地域の占星図を作成しなさい。

そして逆行プライマリーや、ヴァルカンの黄経を計算しなさい。

あなたは私へ、「地上にいた頃のあなたは占星術にほとんど関心を持っていなかったではないか」と言

う。

しかし、私が今語っているのは、数学計算について
なのである。

LETTER XXV

第二十五の手紙

COMPENSATORY PLAY

補償としての遊び

1918 年 2 月 1 日

私は、この数週間、時折あなたの様子を見に来ていた。

そして、あなたがしばらく休息していることを嬉しく思っていた。

野心的で活動的な人間は、ときとして「時折の怠け」の価値を過小評価しがちである。

機械ですら、油も休息もなしに、常に動かし続ける

ことはできない。

それと同じように、もっとも力強い技師のような魂であっても、脳と身体を冷やす時間を与えずに、あまり長く働かせ続けることはできない。

農夫は、畑を休ませるべき時を知っている。

「戦後には」、長い間ただ一つの労働——すなわち戦争——に従事してきた兵士たちへ、産業という蜂の巣へ戻される前に、「補償としての遊び」の期間が与えられることを望みたい。

彼らに、しばらくの間、何もしないという状態の風と香りを楽しませなさい。

その休息から生じる反動が、再び活動への新たな意欲を持って、彼らを工場へ送り返すことになるだ

ろう。

もし世界が、数週間ほど少ない生産でやっていかなければならなくなったとしても、それで世界が傷つくことはない。

これからの時代、アメリカには、より多くの休息と娯楽が存在するようになるだろう。

ヨーロッパでは、この戦争の後、ある程度の疲弊が訪れることになる。

そしてアメリカは、より低い蒸気圧でも十分に自分の地位を保つことができる。

怠けているように見える時間も、ときには労働に費やされる時間と同じくらい価値がある。

いわゆる怠惰な時間の中でこそ、私たちは瞑想し、
自分自身と親しくなり、空想の城を築くのである。

そして、その空想の城とは、未来の建築物の設計
図なのである。

空想は良いものだ。

私は生前、一つの空想を抱いていた。

そしてそれは、今ここで私が築いている未来の、本
当の設計図だったのである。

私は、かつて失ったものを取り戻したいと願ってい
た。

そして私は、それを取り戻した。

あなたは、それが何だったのか不思議に思うだろう。

だが、私はそれを話しても構わない。

私は以前の人生で、達人への道をかなり遠くまで進んでいた。

しかし、ある時、私は大きく後退してしまった。

私の空想は、その失われた地点を取り戻すことだった。

そして私は、この世界でその多くを取り戻したのである。

もし私が、その空想を鮮明に意識したまま地上を去らなかったなら、私はここまでの進歩も回復も遂

げることではできなかっただろう。

先日、私は古い友人と話していた。

とても大切な古い友人であり、一、二年前にこちらへ来た人物である。

そして彼女と私は、一緒に夢見ていた空想こそが、最近の人生においてもっとも価値ある成果の一つだったという点で意見が一致した。

彼女もまた、自分が失った場所を取り戻す歓びに浸っている。

そして年月が過ぎるにつれて、彼女は私と良い競争をすることになるだろう。

そう、達人性という回復された地面の上を競争す

ることもできるのである。

先日、その友人は笑いながら言った。

「こちらへ来てからというもの、実行しきれないほど
多くの計画を立ててしまったわ。」

そこで私は助言した。

「実行はゆっくりやりなさい。あなたには永遠があるのだから。」

すると彼女は、私がよく覚えている昔ながらの仕草
で私を見つめ、こう言った。

「時間は奴隷のために作られたものかもしれない。
でも永遠は、マスターたちのために作られているの
よ。」

彼女もまた、自分がこちらへ来たことを喜んでいる。

彼女は、一種類の仕事を十分長くやって来た。

そして今は、別の仕事を楽しんでいるのである。

彼女が私を助けているのか、不思議に思うだろうか。

いや、そうではない。

ただし、再び共にいる歓びを「助け」と数えるなら別だが。

なぜ彼女が私を助けねばならないのか。

あるいは私が彼女を助けねばならないのか。

私たちの仕事は、それぞれ自分自身のものなのである。

あなた方地上の人間は、助けられる時には互いを助けるべきだ。

しかし、こちらでは、同じ高さにいる者同士は、「存在すること」によって互いを助け合う。

それもまた良い助けなのである。

ただ共に存在すること、それだけで。

ところで、「being together(共に在ること)」とは、なんと素晴らしい表現だろう！

なんという詩情だろうか！

一緒に働くことでも、一緒に遊ぶことでもない。

ただ、共に存在すること。

愛する友人と共にいる時、あなたもきっと、その喜びを感じたことがあるはずだ。

その喜びには、言葉は必要ない。

むしろ言葉は、それを口に出す努力そのものによって、その喜びを減少させてしまうことさえある。

努力のない存在。

鳥たちでさえ、それを楽しんでいる。

そして薔薇もまた、その喜びについて価値ある秘

密をあなたへ教えることができるだろう。

地上にいた頃、私は忙しがり屋たちが、美しい女性について「あの人は何もしていない」と言うのを聞いたことがある。

だが、それがどうしたというのだろう。

薔薇はミシンを動かしたり、本を書いたりはしない。

歓びは、いつの日か世界へ戻って来る。

それは長い間、姿を消していた。

「存在すること」そのものが、生き延びたことを喜ぶ人々の心の中で、新しい意味を持ち始めている。

長い戦争のあらゆる危険を通り抜け、それでもなお「生きている人間として存在している」ということは、魂を驚かせるに十分なことである。

この戦争を最初から戦ってきた人々は、ついに平和のハンモックの中で手足を伸ばせるようになった時、あまり急かされるべきではない。

彼らはその権利を勝ち取ったのである。

彼らが兵士時代の話語る時には、敬意を持って彼らを見つめなさい。

彼らは、あなた方のために死の影の中を通り抜けたのである。

神が彼らを、なお御自身の身体の活動する細胞として留めているのは、まだ彼らを必要としているか

らだ。

しかし、それは、彼らが一分一秒たりとも休まず働き続けねばならないという意味ではない。

しばらくの間、今度はあなた方が彼らのために働いてみてはどうだろう。

彼らが十分休息したなら、再びあなた方の労働へ加わることになるだろう。

昨夜、私は二人の兵士の会話を聞いていた。

彼らは互いにこう語っていた。

「全部終わったら、お前はどうするんだ、ジョン？」

「毎朝一時間、暖かく柔らかい石鹸水の入った浴

槽の中で横になるよ。

そして午後には、愛しい女の子たちを次々に訪ねて、お茶を飲みながら、彼女たちの話を聞くんだ。

お前は どうする？」

「ああ、俺はただ妻を見つめて、その手を握っているだけさ。」

無駄話だと思うだろうか。

それは、「無駄話」という言葉をどう定義するかによる。

私には、その会話は非常に重大な意味を持っていた。

スペインとの小さな戦争の直後、私はある活動的な女性が、自分の夫についてこう言うのを聞いたことがある。

「あの人、キューバから帰って来て以来、何の役にも立たなくなったのよ。」

そこで私は言った。

「まあ、キューバでは大いに役立っていたのでしょう。」

米西戦争！

この戦争と比べれば、象に対する蠅のようなものだ。

そしてドイツ人もまた疲れている。

戦後、あなた方は彼らに追いつくために、それほど働き過ぎる必要はないかもしれない。

LETTER XXVI

第二十六の手紙

THE AQUARIAN AGE

水瓶座の時代

1918 年 2 月 2 日

あなたは、不思議に思っていた。

なぜマスター達が、今になって一般の人々の利益
について語るのか。

以前は、そのようなことについてほとんど語らな
かったのに、と。

しかし、ある物事が必要とされる時期が来たなら、
マスター達の世界に対する働きとは、世界をその

運命の方向へ押し進めることだと、あなたは知らないのだろうか。

あなたは、鉄の時代や黄金時代などについて読んだことがある。

そして、黄金時代は鉄の時代の後に来るとされている。

これほどまったく異なる二つの状態が、どうして隣り合って存在できるのか、不思議に思ったこともあるかもしれない。

だが、鉄の時代と黄金時代との間には、移行期が存在する。

それは、一つの大時代と比較すれば短い期間である。

たとえば、もっとも長いとされる黄金時代は、百七十二万八千年とされている。

私は今夜、黄金時代がすぐ目前に迫っていると告げるために来たわけではない。

いや、決してそうではない。

しかし、私たちは今、一つの小周期の終わりへ近づいている。

そして、現在の世界状態から次の状態への移行期間は、およそ千年ほどになるだろう。

つまり、この千年の期間が、いわゆる「水瓶座時代」の中頃へ私たちを導くのである。

なぜなら、この小さな黄道周期の半分が、ほぼその長さだからである。

＊おそらく、まだ黄金時代には遥かに及ばない。——E・B

＊＊これは一般的なヒンドゥー教の計算法とは正確には一致しない。だが、自動筆記というものは、そのまま受け取るしかない。私は繰り返しなどを削除することはできても、書き換えたり、付け加えたり、歪めたりすることはできない。——E・B

水瓶座時代とは何か。

あなたは、水瓶座の人道主義的な性質を知っている。

また、現在、水瓶座に関連づけられている惑星、天王星の特性も知っている。

ならば、結論は明らかである。

私たちは、水瓶座的な世界を迎えることになる。

そして、奇妙で急激な惑星である天王星の性質に従って物事が進む世界になるのである。

古い型の世界——木星的な世界——は過ぎ去りつつある。

そして私たちは、政治的、社会的、宗教的、個人的な変化の時代へ入ろうとしている。

国家連合への試みが起こるだろう。

魂の連合への試みも起こるだろう。

この戦争以外には、それを実現することはできなかった。

しかも、その実現は、神秘的な惑星・天王星の特徴である突然さを伴っている。

後の水瓶座時代には、人間の創造的意志は、これまで世界が夢にも見なかったほどの広がりを持つことになる。

その意志は、これまでそれを縛っていた制限から解放されるのである。

すべての人に生活手段が保障された時、人々の精神はどれほど自由になるだろうか！

過去のアメリカのような自由国における自由ですら、新時代がもたらす自由とは比べものにならない

い。

教育が本当に普遍的なものとなった時には、精神だけでなく道徳も訓練されることになる。

そして、新しい思想が、発達しつつある脳の中で成長する余地を持つようになる。

恐れてはならない、世界よ！

三年前には、こちら側で遠くを見通している私たちですら、あなた方の惑星の未来について深刻な疑いを抱いていた。

しかし偉大なマスター達は常に、世界は試練の時代を通り抜けても、なお古い軸の上で均衡を保ち続けるだろう、と私たちへ語っていた。

そして秩序を生み出す力が、無秩序を生み出す力に勝利するだろう、と。

あなたは、サイキックな世界において、緊張が弱まっていることに気づかなかっただろうか。

戦争初期には、地球やあなたや全人類を悪意に満ちた勝利によって脅かしているように見えた、あの敵対的で有害な存在たちが、今は姿を消していることに気づかなかっただろうか。

それは、「世界と世界の間を吹き抜ける風」の向きを示す一本の藁なのである。

あなたがサイキックな状態を鋭く観察する人物であることを、私は嬉しく思っている。

その観察力は、これから来る年月の中で、あなたに

役立つだろう。

新しい状況へ適応できない者たちは、一時的に去って行き、後に子供のような新鮮な視点を持って戻って来ることになる。

そして、新時代の中で再び経験を積み始めるのである。

初期には、多くの反抗が起こるだろう。

物事は、四年前に思われていたほど安定してはいない。

戦争は、それらが本当は安定していなかったことを証明した。

現在、世界を横切って広がっているサイキック研究

の波は、可視世界と不可視世界との間のヴェールを薄くしていくだろう。

ますます多くの男女が、同時に二つの世界に生きるようになるだろう。

なぜなら、その二つの世界は同じ空間を占めているからである。

両者の違いとは、意識の違いであり、振動の違いであり、後者には物質状態の違いも含まれているのである。

人間は、これから自分たちへ作用する影響のもとで、より磁気的な存在になっていくだろう。

彼らは互いにますます強く影響し合うようになる。

そして、それこそが、より大きな自由が必要となる理由の一つなのである。

新時代がもたらす、より鋭敏な感受性によって、大人数の家族が一緒に共同生活を送ることは、今より難しくなるだろう。

全人類が感情の上では一つの家族となる方向へ進む一方で、それぞれの人間が最善の成長のためには個人的な空間を必要とする、ということが、ますます認識されるようになる。

家族の専制は、家族の中の自由へと置き換わるだろう。

家族生活から専制を取り除けば、それは非常に魅力的なものになり得る。

新時代の、感受性が高く強烈なエネルギーを持つ人々は、毎晩、家族の「中央テーブル」を囲み、その中でもっとも進歩していない者——年長であるという理由だけで人に命令する権利を持つと思い込んでいる者——の、とりとめのない話を聞かされ続けたなら、爆発してしまうだろう。

これは、子供たちが親を敬わなくなるという意味ではない。

しかし、新しい時代の制度の下では、親は子供たちの個人的な人生への必要を尊重し、それを与えるようになるだろう。

そして、そのことによって親自身もまた自由を得るのである。

後期の水瓶座時代における自由は、精神の中に現

れるだろう。

「異端」というものは存在しなくなる。

その言葉自体が廃語になるのである。

聖霊への罪とは、他人の意志を鎖につなごうとする試みである、ということが理解されるようになるだろう。

この相互の寛容から、大きな友情が生まれるだろう。

私たちは、恐れる相手だけを憎む。

そして寛容な世界では、憎しみの種はほとんど存在しないだろう。

すべての人間が学ぶようになる。

学校とは、学習の第一段階に過ぎない。

人間が自分自身の教師となった時、彼は大きな進歩を遂げる。

あなた方が知っている芸術、音楽、文学などは、これから来る時代にそれらがどのようなものになるかについて、ほんの曖昧な想像しか与えない。

たとえば、少し前に流行した「印象主義」という言葉を考えてみなさい。

それは、あらゆる芸術へ適用されるようになるだろう。

科学は、まだ揺り籠の中にいる赤子に過ぎない。

古い書物は、水瓶座は風の星座だと語っている。

そして空気の中には、多くの秘密が隠されている。

あなた方は、それらを自分自身のものにしなければならぬ。

それは輸送に関する秘密だけではなく、心理的な秘密でもある。

飛行機と心霊研究は、共に成長して来たのである。

あなた方は、まだ電気の最後の砦を攻略してはいない。

そこにもまた、あなた方のための宝が存在している。

それが隠れ、あなた方を嘲笑っている空気の中から、その力を取り出せるようになった時、あなた方は石炭をほとんど必要としなくなるだろう。

そして鉱夫たちは、地球の深部から解放され、高地の日光の中で遊べるようになるのである。

発明！

私は、第一巻で語った「あの原型世界」の中に、あなた方地上の人々には理解できないような多くの物を見ている。

新しい織物が、そう遠くない未来に着用されるようになるだろう。

そして、忍耐強い蚕は、現在ほどの貴族的存在で

はなくなる。

人間の自我は、今まさに本来の位置へ向かっている。

それが利己心を失った時、自我は本当の自分自身を見出すのである。

これは、単なる逆説ではない。

心理学的事実の表現なのである。

見かけ上の混沌は、やがて形を取る。

そして、その中に、あなた方は新しい美を見出すだろう。

私は、再建期の間、多くの人々が「混沌」という言

葉を使うことになるだろう、という事実を隠そうとは思わない。

しかし、安心していなさい。

形のないものは、やがて形を持つようになる。

人間の中で発達しつつある透視能力が、古い信仰の目には見えなかったものを見せてくれるようになるだろう。

人間は未来を信頼し、兄弟を信頼するようになる。

そして欺かれることはなくなる。

魂の直感が、人間を幸福に必要な本質へ導くだろう。

空気の背後と内部には、エーテルが存在する。

それは実体であり、神である。

そして人間は、それを自分たちのために用いるようになるだろう。

自らを子供たちへ与えることに歓びを感じる神の同意のもとで。

以前にも言ったように、マスター達は、世界をその運命の方向へ押し進める。

しかし、彼らは急ぎ過ぎるには賢明過ぎる。

彼らは宇宙の時計の文字盤を見ている。

そして、新しい日の出の時刻に、世界を目覚めさせ

るのである。

私たちは、彼らの奉仕者であることを祝福されている。

LETTER XXVII

第二十七の手紙

THE WATCHERS

ウォッチャー達

1918 年 2 月 3 日

私はある日、天上での休息を放棄した偉大な魂の前に立ち、今もっとも強く私たちを呼んでいる仕事とは何かを尋ねた。

あなたは、彼が何と答えたと思うだろうか。

「未来を恐れている者たちと共に働きなさい。」

「それほど多くの者たちが、未来を不安と共に見つめているのですか？」と私は尋ねた。

「考え、見通し、責任を持つ者は皆、不安を抱いている。」と彼は答えた。

そこで私はアメリカ中をあちこち歩き回り、あらゆる種類の男たちと、少数の女たちを見つめた。

そして私は、彼らの心の中に、大きな不確実さを読み取った。

「その日の苦労は、その日だけで十分だ。」

私はその思いを彼らへ非常に強く投げかけたので、多くの者が希望に満ちた微笑みを返した。

そう、私は十分強く念じれば、多くの人々から反応を引き出すことができるのである。

こちら側にいる一人の偉大な魂の信念は、強風が彼らに吹きつけた時、多くの人々が揺らぐ立ち続ける助けとなった。

彼は、アメリカがその運命に失敗することはないと知っている。

しかし、誤った航路を取らぬように、彼は舵取りの手を導き、船長の目の前の霧を払いのけようとしているのである。

この灰色の日々には、「国家という船」の航路の前に、しばしば霧が立ち込める。

ウィルソンが鉄道を国有化した時、そこにはどれほどの勇気が必要だったことか！

すべてが終わった後には、彼を批判し非難する者

が数多く現れるだろう。

しかし批判と非難とは、常に、自我を捨て去り、自国や世界の利益のために働く者たちへの報酬なのである。

自分の人格を船外へ投げ捨てるほど偉大な人間は、批判によって傷つけられることはない。

傷つくのは人格だけである。

魂は、逆風の嵐の上で、静かに純粋なままで立っている。

私は、すべての人間へ人格を無視せよとは勧めない。

大きな責任を担う者だけが、安全に非個人的存在

となることができる。

小さな人間、未熟な人間には、自らの魂を説得して、自分の小さな自己に代わらせることはできない。

魂とは、人格の中へ降りて来るよう説得されなければならないのである。

ほとんどの魂は、部分的にしか受肉していない。

大多数の人間の高次の自己は、上方に離れて存在している。

それが彼らの「サイレント・ウォッチャー」である。

しかし、それは警告し救う時以外、ほとんど行動しない。

それは小さな自己へ、苦しみと喜び、成功と失敗を通して経験を積み、学ぶことを任せているのである。

だが、人間が進化し、その行為が単なる個人的意味を超えるようになると、魂は降下し、その人間を真に導き、影響を与えることができるようになる。

なぜなら、魂の計画は常に個人的領域を超えているからである。

魂は、大いなる全体の意識的な一部であり、自らが礼拝し奉仕する神の意識的な一部なのである。

たとえ低次の自己が、取るに足らないことや冒涇に没頭していようとも。

魂を失っていない人間なら誰に対しても、高次のウォッチャーは関心を持っている。

なぜなら、ウォッチャーは一つでありながら、多数でもあるからである。

彼は、あなた方と神とを結ぶ絆である、人間たちよ！

彼は、あなた方と不死とを結ぶ絆なのである。

あなた方は、ただ死ぬだけで彼と出会うわけではない。

死後、彼と真正面から出会うまでには、長い間アストラル界や低位メンタル界に留まることもある。

しかし、もし死後に高次の領域へ昇ることができた

なら、そこで彼があなたを待っているのを見出すだろう。

そして、あなたは最近の人生で得たすべての美しい果実を彼へ持って行くことができる。

彼は、それらをあなたと共に楽しむだろう。

私は、自分自身の魂と真正面から出会ったことがある。

しかし今は、地上の諸民族のために成すべき仕事があまりにも多く、私は高次領域に留まり、その美を静かに観想していることができない。

いずれ私は再び上昇するだろう。

しかし、私が長い滞在のために天へ行った時には、

あなた方はもう私の声を聞くことはないだろう。

そう、私もまた、あなたの魂を見たことがある。

だが、その顔をあなたへ説明する必要はない。

なぜなら、あなた自身の方が、私よりもそれをよく見ているからである。

それにしがみつきなさい。

死すべき友情の破綻も、自らのサイレント・ウォッチャーへ到達できる者の信仰を打ち砕くことはできない。

そして、不実な友の魂もまた、彼自身の魂と同じく純粹であり、すべてを理解しているのである。

友情は、愛と同じく、天上で作られる。

真の友情は死なない。

その根は永遠の水の中深くへ伸びている。

それはユグドラシルのように不滅であり、その根は上方にあり、枝は下方にある。

だが、商売で失敗するより、友情において失敗する方が悪い。

もし人間が十分に偉大で強いなら、自らの魂を引き下ろし、どこにしようとも共に住まわせることができる。

その時、その人間は完全な人間となる。

彼は達人なのである。

リンカーンは、そのような人間、そのような魂である。

彼は自らの高次ウォッチャーと一体化した。

そして、一つとなった二者は、アストラル界の領域においてさえ働くことができるのである。

だが、そのような天と地の結婚は稀である。

達人が稀であるように。

あなた方の天の父は、大いなる父と一つである。

そして、もしあなたが本当に自らの天の父と一つであるなら、彼は地上においてさえ、あなたと共に住

むことができる。

今、人類の高次の魂たちは、これまで何世紀もの間そうであった以上に、人間へ近づいている。

扉は開かれたのである。

悲しみと恐怖と苦痛、そして義務という理想への献身が、この三年半で人類を高めた。

それは、百年の平和では成し得なかったほどの高まりである。

もし今、人類が後戻りするなら、それは失われた機会となるだろう。

だが、人類は後戻りしない。

LETTER XXVIII

第二十八の手紙

A RITUAL OF FELLOWSHIP

友愛の儀式

1918 年 2 月 8 日

私はこの三十分の間、あなたを待っていた。あなたは縫い物をしながら、フランスにいる友人たちのことを考えていた。

今では、フランスのことを思うと心が温まる。

二つの偉大な共和国を結ぶ絆は、ますます強く結ばれつつある。

秘教的な秘密を一つ話そうか。

フランス人は、ずっと昔に自分たちの血を我々の血と混ぜた。

だから私たちは、ずっと彼らを愛してきたのである。

そして今、私たちはフランスの血と自分たちの血を再び混ぜ合わせている。

だから、これから来る時代に、フランスは私たちを愛するようになるだろう。

その血の混合こそ、友愛の儀式なのである。

イギリス人とフランス人、アメリカ人とイタリア人、アイルランド人、スコットランド人、そしてその他すべての人々。

そこには兄弟愛の土台があるではないか。

混ざり合った血は、愛を求めて地面から叫んでいるのである。

私はフランス人たちの目の中に、我々の兵士たちに対する感情を見ている。

彼らが行進する時も、アメリカの若者たちが慣れ親しんだ小さな助けを行う時も、フランス人たちはその感情を目に宿している。

彼らはもう二度と、我々を「海の向こうから来た奇妙な人々」とは見ないだろう。

私たちは彼らの国を旅し、金を使い、威張り散らし、鼻にかかった声でしゃべっていた。

しかし今、私たちは彼らと共に生き、彼らと共に死
につつある。

そして私たちは、血を分け合った兄弟なのである。

そうだ、行ける時には再びフランスへ戻りなさい。

彼らは昔から、あなたが彼らを愛していたからこ
そ、いつもあなたを愛していた。

だが今や、彼らがあなたの祖国をも愛していること
を、あなたは理解するだろう。

LETTER XXIX

第二十九の手紙

RECRUITING AGENTS

募集係たち

1918 年 2 月

アメリカが戦争状態にあると宣言してから一、二日の間、私はほとんどの時間をこの国のあちこちを巡り、二つの世界の状況を調べることに費やした。

その調査を行う以前から、私はそれらの世界の状況について大まかな理解は持っていた。

しかし私は、自分の記憶を新たにしたかったのである。なぜなら、私は一つの大きな構想を抱いていたからだ。

地上で生きていた頃、私は何度も「自分には偉大な考えがある」と自分自身に言い聞かせていた。

そして時にはそれを実行に移し、時には失敗した。

だが今回は、絶対に失敗させないと決意していた。

調査によって、必要な材料がすべて揃っていることを確認すると、私は一人の偉大な存在を訪ねた。

偉大な人物と言ってもいいし、霊と言ってもいい。
好きなように呼べばよい。

それから私たちは共に作戦を立てた。

その主な要点は次の通りである。

保存——そこでは消極的な力が用いられるべきである。

建設——そこでは積極的な力を用いる。

調整——そこでは統合する力を用いる。

私たちは、こちらの世界に長く滞在し、自分たちの行動方法だけでなく、肉体を持つ男女の心に思考を刻み込む方法まで理解している、意志の強い男女を集めた。

彼らは各地へ派遣され、上院議員や下院議員、産業界の指導者たち、そして一般市民の周囲で、考え、考え、考え続けた。

彼らが送り込んだ思念の中心は、食糧の節約、支出の節約、そして戦争活動に必要なあらゆる

物資の保存であった。

また別の者たちは、自らが最後に生まれた土地であるアメリカへの深い愛に満たされながら、集団で各地を巡り、長い間アメリカを当然のものとして受け取ってきた数百万の人々の心に、愛国的熱意を注ぎ込んでいった。

彼らは愛国歌を歌った。

その歌声は地上の耳には聞こえなかったが、その歌の精神は感じ取ることができ、多くの成果をもたらした。

さらに別の者たち、すなわち昔の偉大な指導者たちの中でも最も賢明な者たちは、混乱を鎮め、戦争への不満を抑えることに力を尽くしていた。

狂気じみた目をした「理想主義者」たちが集まり、平和論をだらだらと語り始める場所には、必ず一人かそれ以上の目に見えない聴衆がいて、彼らの危険な思想に対して熱狂的な反応が起こるのを抑えていた。

私たちが実行しようと努力した、この援助計画の詳細をすべて語って、あなたを退屈させるつもりはない。

しかし、こちらの世界では百万人以上の存在たちが登録され、自分たちの奉仕が不要になるまで働くことを誓ったのである。

あなたには、百万人という数は、一億を超える国民を目に見えない形で助けるには少ないように思えるかもしれない。

しかし、活動的な働き手においては百人に一人で十分なのである。なぜなら、それぞれが地上経験の浅い者たちを助手として自由に選べるからだ。

この補助軍の総司令官として働いた存在に対し、各将軍たちは報告を行っていた。

そして彼が下す命令は、しばしば奇妙なものだった。

だが誰一人として、その知恵を疑わなかった。

結果が、何度も何度もその正しさを証明していたからである。

ある時、私は北へ行こうとしていた。

だが彼は私を南へ送った。

そして私はモービルで、自分の進路が変更された理由を知った。

ここ数か月、各州議会の議員たちが「幽霊を見た」と言い出さなかったのが不思議なくらいだ。

もしかすると、実際には見ていたのかもしれない。

しかし今では、人々は私たちの存在という考えに慣れ始めている。

それは、この戦争がもたらした良い結果の一つである。

愛する者たちを求めて境界の向こうを見つめる時、人々は教師たちに、さらには愛する者たちの天使たちに出会い、心を広げられるかもしれない。

私は————という町で、面白い経験をした。

そこには「平和主義者」がいて、ある集団の中でかなりの影響力を持っていた。

彼が一人、あるいは数人に向かって「哲学的」な話を始めると、私は彼の耳元で話しかけ、彼の質問に答えることで、彼を混乱させることができた。

不思議なことに、彼には私の声が聞こえていたのである。

だが彼は、世界と世界の間で通信が可能だとは信じていなかったため、自分は「霊聴の幻覚」を経験しているのだと思い込み、医者にご相談した。

その医者は平和主義者ではなく、彼に「戦争につい

て考え込みすぎたのだ」と告げた。

そして医者、その友人に鳥類学を始めるよう勧めた。

そう、彼は若い。

そしてこれからも多くの転生の間、若いままだろう。

私たちは徴兵活動にも、自分たちなりの貢献をした。

後に徴兵された者たちは、単に励まされただけだった。

だが中には、私たちが送った夢や、耳元でささやいた思念だけで、正しい方向へ進む者たちもいた。

そして若者の祖国が戦争状態にある時、「正しい方向」とは、たいてい最寄りの募集所へ向かうことなのである。

———に、一人の少年がいた。

彼はフランスと、フランスでの戦闘について読みながら、胸が締め付けられるような恐怖を感じていた。

彼は徴兵を恐れていた。

彼は頑丈な若者ではなかった。

銀行で簿記係として働いていたため、脚の筋肉は鍛えられておらず、胃腸の調子も不安定だった。

そのため彼は、自分は兵士として失敗するに違いない、と自分に言い聞かせていた。

だが、ある時、その青年が眠っている間にこちらの世界へ出て来たので、私は彼に会い、一緒に散歩しようと誘った。

私が彼を戦場へ連れて行ったと思うかね？

いや、そんなことはしなかった。

私は彼を訓練場へ連れて行ったのである。

あなたは、どうして夜にそんなことができたのか不思議に思うかもしれない。

だが偶然にも、彼は昼間に眠っていたのである。

そして私は、彼が一時的に離れていた世界——地上の世界——を見下ろし、その訓練場を見ることができるよう、彼を助けた。

彼はそれに興味を抱いた。

翌日になると、帳簿を扱う仕事はいつも以上に退屈で単調に思えた。

そして彼は、支払窓口の前で、一人の少女が友人に向かって「青白い顔をした事務員なんて、自分の理想の男性じゃない。私は兵隊の男の子たちが好きなの」と話しているのを耳にした。

銀行の仕事が終わった後、彼が散歩に出かけると、私は彼について行き、立派な軍楽隊を伴って行進する兵士たちへ彼の注意を向けさせた。

その青年は家へ帰ると鏡を見た。

そして自分の顔色が青白いことに気づき、自分がただの事務員であることを思い出した。

そこで彼は志願したのである。

あなたは、なぜ私がそれほどまで苦勞して、一人の取り柄のない若者をアンクル・サムの軍隊へ加えようとしたのか不思議に思うかもしれない。

その種の仕事には、私たちには大勢の部下たちがいたのだから。

だが私は、その青年の父親を二十年前に知っていたのである。

そして彼がかつて口にしたある言葉が、私の死後

の人生全体を照らすような決断へと、私を導いたのであった。

その青年が戻って来る時には、もう青白い顔ではなくなっているだろう。

そして彼は、もはや事務員ではなく、一人の英雄になっているだろう。

私は借りを返すのが好きなのだ。

LETTER XXX

第三十の手紙

THE VIRUS OF DISRUPTION

崩壊の病毒

1918 年 2 月 16 日

「自制と社会的責任を伴った自由」——これが、これから先の年月におけるアメリカ人の良い標語となるだろう。

ボルシェヴィズムやアナキズムなどの地下的・公然たる宣伝活動は、破壊の力によって鼓舞され、養われている。

だがそれらは、秩序の精神、自制の精神、そして国家共同体に対する責任感によって、十分に対抗す

ることができる。

この戦争が終わっても、それで混乱が終わるわけではない。

世界の魂は、崩壊という病毒を注入されてしまった。

そして、その毒を追い出し、人類という身体を再び健康と安全へ戻すためには、共通の目的のために共に働く何百万もの意志が必要となる。

我々が知っているアメリカは、かつて抑圧への抗議から生まれた。

そして自由への愛が、その父であり母であった。

積極的な力と消極的な力、その両方がそこにあっ

たのである。

もし今、抑圧への抗議が、あらゆる抑制への抗議へと墮落し、自由への愛が放縦への愛へと墮落するならば、自分自身を統治できない者は、外側から統治されることになる、と私はあなたに告げよう。

人類は今、イニシエーションの時代を通過している。

道徳的に弱い者、意志の弱い者は、いつでも流される危険を抱えている。

破壊の精神は、そのような者たちを、自らの意志を実行するための都合の良い道具として利用するのである。

天国は、すぐ目の前に来ているわけではない。

この大きな揺さぶりを受けた後、人類の意識が落ち着くまでには、まる七年が必要となるだろう。

そしていつものように、そのような場合には澱(おり)が浮かび上がり、杯の液体全体へ広がっていくのである。

もしアメリカ合衆国の中に、現在の世界的混乱の背後にある秘教的な力を理解している者、あるいは理解できるようになる者が、たった十二人でもいたならば——そして、その十二人が、一人の指導者のもと、ある者はここで、ある者はそこでもって、筆と声と意志を使い、同じ目的のために一致して働くことができたならば——その十二人は、人々を荒野から導き出すことができるだろう。

だが、その十二人はどこにいるのか。

すべての指導者は、「一致の中に力がある」ことを知っている。

そして私は、その反対の法則についても触れておこう。

「不一致の中には崩壊がある」という法則である。

ボルシェヴィキやアナキストたちは、世界が自分たちの気に入るものではなく、また、自分たちの権力欲や安逸への欲望を満たせるように環境へ適応することもできないため、自分たちが成功できない社会そのものを破壊することに身を捧げている。

彼らは、自分たちが正しいと信じている。

ほとんど最悪の人間の中にさえ、神的なものが非

常に多く含まれているため、彼は悪を行っている時
でさえ、自分は正しいことのために働いているの
だ、と信じなければならないのである。

殺人者でさえ、自分の行為を正当化しなければ、
その行為を実行できない。

盲目的な激情に流された場合を除いては。

そしてその場合でも、彼は激情そのものを正当化
しようとする。

人間の心は、人間の頭脳よりも優れている。

ほとんど誰でも善い衝動を感じることはできる。

だが、自分の情熱から独立して考えることのできる
人間は、稀で孤立している。

大衆教育は、万人に推論力を与えることを意味しない。

しかし、大衆教育は始まりなのである。

それは、世界知性という木へ成長する種なのである。

私は、人類の心をついに慰めることになる愛の支配について語ってきた。

だが、それが明日や明後日に来るとは語っていない。

もしあなたが、個人的なものや一時的なものから離れ、人生と周期の動きを遠近法の中で見ることができるならば、この一時的な不安が、単なる通過

点にすぎないことが理解できるだろう。

環境へ適応する者は、不安定な状況に対してさえ
適応する。

そのことを忘れてはならない。

しなやかな木は風を感じる。

だがその根は、個性という土壌と岩へしっかりと食
い込んでいる。

アメリカよ、そのしなやかな木のようにありなさい。

世界を吹き抜ける風の中で、自由という土壌と、社
会的責任という岩にしっかりとしがみつきなさい。

もしあなたが、それらの土壌と岩を手放さないなら

ば、あなたは世界を救うことができる。

それらは、あなたを支え、安定させてきたものだからである。

炎上するヨーロッパの不安げな目は、あなたの方を向いている。

友は希望をもって、敵は恐れをもって。

あなたが、その若く強い身体の重みを正義の天秤へ投じた時、あなたは世界の運命を変えたのである。

そう、それはあなたの運命だったのだ。

「オカルティズム」を学んできたあなたたち——それは単に、物質主義的な心には理解できないほど深

い知識を意味する——あなたたちは、イニシエーションの候補者には試練と試験が訪れ、それなしには先へ進めないことを知っている。

人類全体を、イニシエーションを受ける候補者として考えなさい。

もしあなたの精神が、周囲の人々よりも発達しているならば——あなたも、あなたも、そしてあなたも——自分たちが、断ち切ることのできない絆によって彼らと結ばれていることを忘れてはならない。

あなたは人類から切り離されることはできない。

マスターのようにその上へ昇ることもできるし、失われた魂たちのようにその下へ沈むこともできる。

だが、あなたと他の神の断片たちとの結びつきは、

危険を冒さずには断ち切れないのである。

マスターは人類のために働く。

なぜなら、人類を無視して安全でいられないことを、よく知っているからである。

たとえば彼が自分を神々と同等にし、自分自身の世界を築こうと望んだとしても、その世界を作るための素材は、共通の素材の貯蔵庫から取らねばならない。

もし彼が蜘蛛のように、自分自身から世界の網を紡ぎ出せたとしても、自らの力を維持するためには、やはり共通の素材を食べなければならない。

だから、人類を愛した方がよい。

結局のところ、完全に逃れることはできないのだから。

たとえあなたが上昇し、精神の王国の薄い空気の中に住むようになったとしても、上下にいる仲間たちから吹いて来る風の流を感じるようになる。

これを否定する者もいるだろう。

だが私は、その試みを実際に行った。

私は最近、休息のために高い場所を求めた。

だが世界の必要が、私を再び引き戻したのである。

これから数年間、世界にとって最も必要となるものは、「保存の法則」に関する知識である。

世界よ、保持しなさい。

あなたが何世紀にもわたって努力して築き上げてきた宝を保持しなさい。

そして捨てるべきなのは、古びた衣服や道具だけにしなさい。

木製の鋤や木靴は、賢明に秩序づけられた世界では、もはや必要ない。

しかし、科学と芸術は必要となるだろう。

そして、あなたが破壊したゴシック大聖堂は、二度と取り戻すことができないのである。

LETTER XXXI

第三十一の手紙

THE ALTAR FIRE

祭壇の火

1918 年 2 月 18 日

常に、対立するもの同士の引き合いが存在する。

国際主義についてこれほど語られている時代であっても、我々は国家主義を忘れてはならない。

現在の敵は、それを大いに利用した。

だが彼は、その反対の力を計算に入れていなかった。

地上のすべての国々に、商業代理人としてスパイを送り込むことは、真の国際主義ではない。

すべての国々の中で、アメリカほど、自らの標語を実践するのに適した国はない。

「一人は皆のために、皆は一人のために」である。

しかし、他の民族や他の国民への愛の中にあっても、彼女は自国を強め、支えることを忘れてはならない。

「わが祖国よ、汝のために！」

その感情があなたの心の中でますます強くなるにつれて、あなたは他国に対する正義によって、それぞれの国が、その国民自身のものであることを認めるようになるだろう。

なぜなら、あなた方の国は、世界支配という思想の上に築かれたのではなく、自由——あなた方自身のため、そしてすべての人々のための自由——という思想の上に築かれたからである。

あなた方の大統領は、「言葉を作る男」と呼ばれてきた。

それは良いことである。

世界中をひとりで巡っていくような言葉を作る男は、世界の思想に影響を与えることができる。

「世界を民主主義にとって安全なものにするために。」

その言葉は、何世紀にもわたって語り継がれるだ

ろう。

ヨーロッパの歴史ある土地を愛するアメリカ人たちよ、あなた方を生んだこの国を過小評価してはならない。

今やこの国は、最も偉大な国々に匹敵する存在であり、その時計はまだ正午十二時を打ってはいない。

アメリカは、まだ朝なのである。

現在のアメリカ人は、第六人種の人類の祖先である。

彼は多くの系統から生まれ、その血は、それ以前のあらゆる人種の血を混ぜ合わせたものとなるだろう。

彼は、その特質において独特の存在となる。

古い人種のいかなる人間も、彼を真似することはできない。

なぜなら、彼の意識は彼自身のものだからである。

人間とは、あなた方がこれまで何度も言ってきたような、何ポンドかの肉や骨や血や筋肉ではない。

人間とは、意識の状態なのである。

あなた方が人々の意識の状態を、その人自身として認識するからこそ、男や女は、自らをあなたに現すのである。

もし——あるいは、いつか——あなたがヨーロッパ

へ戻って暮らすことになったとしても、自分の国を忘れてはならない。

あまり長く離れていてはならない。

さもないければ、第六人種の中で花開くことになる、その独特の意識との結びつきを失ってしまうからである。

そう、偉大な芸術がアメリカに育つだろう。

あと五十年もすれば、それは成熟する。

その後腐り始めないことを願おう。

健全なアメリカの林檎のように、その確かさを長く保ってほしいものである。

この戦争は、アメリカにとって良いことである。

あまりにも大きな物質的成功を、痛みや苦闘なしに
得ることは、人種にとって良いことではない。

心を円熟させるのは、苦痛なのである。

アメリカは、まだ自らの魂を見つけていない。

だが、やがて見つけるだろう。

今、心を碎かれているアメリカ人たちは、自らの魂
を見つけてつつあるのである。

フランスは、ずっと以前に自らの魂を見つけた。

そして今、彼女は自らの神性を見つけてつつある。

苦しみなしに、それを見つけられただろうか。

十字架上のキリストは、カナのガリラヤの婚宴にいるキリストよりも偉大である。

もし私が、あなたにこの本を書いてほしいと望まなかったならば、私はあなたをロンドンへ送り返していただろう。

空襲の緊張と、食糧不足を経験させるために。

私はあなたをフランスへ送り返していただろう。

傷ついた者たちを見て、触れ、世話をさせるために。

あなたは、戦時下のアストラル界の緊張には耐えてきた。

しかし、フランスの女性たちが見て、触れ、味わってきた、肉体的苦痛の苦悶を、まだ見ても触れても味わってもいない。

だが、人はあまりにも多くの世界で同時に生き、苦しむことはできないのである。

今フランスで戦っている我々のアメリカの若者たちは、その経験によって、より偉大な存在になるとは思わないか。

彼らが生きようと死のうと。

物質的形態での生命だけが、唯一の生命ではない。

大いなる犠牲を払う者たちは、失う以上のものを

得るのである。

理想のために死ぬことは、崇高なことである。

「世界を民主主義にとって安全なものにするために。」

アメリカは、今や以前よりもはるかによく、ヨーロッパ人たちに知られている。

あなた方の多くは、これまでそうしてきたように、行き来を続けるだろう。

そして、そのうちの少数は、アメリカとヨーロッパとの相互理解を、生きたものにする役割を果たすだろう。

だが、それを行えるのは、自らの国民性を心の中

で讃えることによってのみである。

私は、それを誇示せよと言っているのではない。

それを、あなたの存在の秘密の神殿の中で燃える
祭壇の火のように保ちなさい。

終わり